
魔法少女リリカルなのはA'S 次元を超えし願い

碧河 蒼空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはA・S 次元を超えし願い

【Nコード】

N4326L

【作者名】

碧河 蒼空

【あらすじ】

「「家族が欲しい」」

次元を超えた二つの願いが重なり、とあるロストログアがそれを叶えた。

hit達成記念は、魔法少女リリカルなのはのクロス小説の嘘予告となっています。

1万hit記念…×ロックマンエグゼ3

※ノリで書き始めた小説です。大まかなストーリーは考えていますが、細かいプロットはありません。それを承知の上、お読み下さい。

プロローグ

銃声が辺りに響き、二人の男が倒れる。男の仲間が音の出所を向き、視界に入った人影に向けて持っていたマシンガンを放った。しかし、人影は弾丸が放たれる前に建物の影に飛び込んでいた。

そいつは起きあがると、弾丸の嵐がすぐ横を通り過ぎる中、パイプを伝って建物の二階と三回の間回りまでよじ登り、足を固定して身を乗り出すと、残った敵を全て撃ち殺す。打たれた男達は上など見ていなかったため、誰もさっきの人影を視認する事が出来なかった。

とある市街地戦の一風景。現在、そこにある人影は五体の死体と、十歳を漸く越えたであろう一人の少年だった。

その頃、

「アルハザードへ!!」

時の庭園にて十一個のジュエルシードが発動した。

ロードクンナー

ジュエルシードに集められた魔力の一部が別の世界に流れ込む。

そこは、ジュエルシードが発掘された場所だった。

更にその頃、第97管理外世界。

車椅子に乗った十歳にも満たない少女がテレビを付けると、ちょうどホームドラマがやっていた。少女は特に目的もなく付けたテレビをじっと見ている。

それなりの広さがある一軒家にある音源はテレビと少女のみ。少女の両親は既に他界しており、家族はいない。回りには平気そうに

ても殺しても殺しても…。

こんな映像が流れているのにも関わらず、少年は何も感じていなかった。まるで、他人事のように流れる映像を見ている。

しかし、最後の映像が流れた途端、今まで何も感じてなかった少年の心が乱れた。その映像は少年が戦友の家に招待された時のものだった。

戦友とその家族は少年の過去を知ってたからか、まるで彼の事を家族のように扱ってくれた。何だかくすぐったがったが、少年の心はとても安らいだ。

「君は本当に憎しみで戦ってるのかい？」

今のは戦友に問われた事だ。あの時は肯定したが、今、少年は本当の答えにようやく気付くことが出来た。

「少年はただ寂しかっただけなのだ。」

それが混乱により、感情が混沌としてしまったのだ。それが、恨みという形に落ち着いた。

映像が終わり、意識は闇へと落ちていく。その中で少年は願った。

「家族が欲しい」

二つの願いが次元世界を越えて重なった。

青い光が少年を包む。

第97管理外世界

「な、何や!？」

車椅子の少女の目の前に青い光が表れたと思ったら、その中から青い光を放ちながら宙に浮かぶ宝石のような石と、血だらけの少年が表れた。訳が分からず混乱していると、石は少年の中に取り込まれ、今度は少年の方が青く光り、すぐに光は消える。

しばらくして、落ち着きを取り戻した少女は、

「た、大変やっ」

119番に連絡を入れたのだった。

プロローグ（後書き）

お初の方は初めまして、そうでない方はこんにちは。
みどりかわ
碧河 ごくう 悟空と申します。

見ての通り、三流どころか八流の物書きです。

こんな小説ですが、暇つぶしにでもなれば幸いです。

さてさて、

主人公が軍人、ジュエルシードとの融合

これは弟の小説の設定だったりします。（勿論、許可は取ってますよ（汗））

もしかすると、弟もここでその小説を投稿するかもしれませんが、それはパクリじゃありません。むしろ、こっちがパクリです（爆）

あ、もしプロローグまで全く同じだったら、それはパクリです。

1話 お亡くなりになりました（前書き）

関西弁が難しい。

あってるかなあ…

駄目出しとか大歓迎です。

1話 お亡くなりになりました

Episode 被爆した少年

目を覚まして目に入ったものは白い天井、白い壁、視線を落とすと白い布団。ここは白い部屋だった。

そうだ、俺は空襲でやられて…。て事は、ここは病院…。あれ？上半身を起こして体を確認してみると、傷が全く見当たらない。腕を回し、腰を捻ってみるが痛みはない。

「んう…」

っ！？ 体の状態を確認していると、横から唸り声が聞こえてきた。慌てて思考を止め、唸り声のした方に視線をを向けると、そこには車椅子に乗ったまま眠っている自分よりの少し年下であろう女の子の姿が目に見えた。

いくら寝起きとはいえ、人が居るのに全然気付かないなんて、気が緩みすぎていた。

少女がうつすらと目を開いて、俺と視線が行き違う。

「あ、起きたんか」

少女は目を擦りながら言った。

「ああ…ここは…？」

現状が分からない以上、俺は警戒を解かない。まずは状況把握に勤める。

「ここは病院や。血だらけだったんやけど、覚えとらん？」

「病院なのは分かる。ここ地名を教えて欲しい」

友軍に拾われたのであれば、窓から見える風景がおかしい。祖国であるクラントの物ではない建物などの風景を見る。かといって、捕虜となったのなら、このような病室など用意されるはずも無いし、目が覚めたら女の子がいた、なんて事は無いはずだ。

「ああ、そういう事やったんか」

少女は少しだけ恥ずかしそうに行った後、

「ここは海鳴市や」

と、俺の質問に答えた。

少女が口にした地名は俺が聞いたことの無いものだ。

「：なあ、ここは何て国なんだ？」

病室はとても綺麗だし、目の前の少女も清潔状態、窓の外の風景などから、この国が先進国であることが分かる。先進国の名前ならば流石の俺にも分かるだろう。

「日本やで」

が、耳にしたのは、聞いた事の無い名前だった。一体、どういう事なんだ？

「なあ、次はわたしが聞いてええか？」

俺が思考に入ろうとすると、今まで俺の問いに答えていた少女が今度は質問してきた。

「：ああ」

「わたし、八神 はやて言うんよ。君は？」

お互いに名を交わしていない事に気付いたように、少女は八神と名乗る。

「：木戸 ケインだ」

名前くらいは良いだろうと思い、名前だけ喋った。

「木戸くんか。よろしくな」

車椅子の少女八神は微笑んでそう言った。

「ん」

俺はただ頷く。

「それにしてもびっくりしたわ。いきなり目の前が光ったと思ったら、中から木戸くんが出て来たんやから」

ん？

「ちょっと待て、どういう事だ？ いきなり光って俺が出て来たって？」

「なんや、木戸くんも知らんの？」

八神が話した内容は俄かに信じがたい内容だった。だが、思い返すと、気を失う直前、目の前が光に包まれた気がする。あれが幻覚で無かったとすると、八神が言ってる事は本当なんだろう。

考え事をしながら、右手を自分の左胸に持って行った。胸ポケットの中にある物を取ろうとしたのだが、中には何も入っていなかった。そういえば、今着ているのはいつもの軍服ではなく、病院の白いパジャマである。

「なあ、俺が来ていた服を知らないか？」

「ああ、それならそこにあるで」

彼女はベットを挟んで反対側にある台の上にある籠を指して言った。俺はその籠を取って中を覗くと、そこには大量の血で赤黒くなった軍服が目に入った。

「…もしやっ」

俺は慌てて、血だらけな軍服の胸ポケットから手のひらサイズの箱を取り出して嘔然とする。

「どうしたん？」

八神が言葉を発するが、その声は俺の頭にはただの音としか届いていない。

俺は恐る恐る箱を開け、中に入っていた十センチにも満たない棒を一つを取り出すと、それは軍服や箱と同じ様に赤黒くなっていた。俺はショックのあまり言葉を発する事が出来ない。

「なあ、それ煙草やろ？そんなんどうしたん？」

いや、まだ火が付くかも知れない。俺は最後の望みに賭け、煙草を口に咥えてライターを取りだが、咥えていた煙草を奪われた。

「子供が煙草を吸ったらあかんっ」

しかめっ面をした八神はそう言うのと、煙草の箱も俺から奪った。「おい、返せっ」

俺は身を乗り出して八神から煙草を奪取しようとするのだが…。

1話 お亡くなりになりました（後書き）

この小説では、

「 .. 肉声

○ .. 念話

《 》 .. デバイスの音声

『 』 .. その他の機械音声

となっております。

2話 木戸 ケインの事情

Episode ケイン

俺は今、女医に説教を受けている。

「あああつ、さっきからグチグチと、あんたは俺の母さんかつ、何なんだっ」

俺が反抗すると、

「あなたの主治医よっ!!」

「痛っ・・・」

頭を思いつきり叩^{はた}かれた。

時は前話の最後に遡る。俺が八神から煙草を取り返そうとしている時、ちょうど女の医師が部屋に入ってきたのだ。八神がその女医に煙草を渡して、事の事情を説明すると、俺は女医に説教を貰うことになった。

「それに、はやてちゃんに暴力を振るうなんて。相手は女の子なのよ!」

「それは八神がたば…」

「口答えしないっ!!!」

「はいっ!!」

俺は反論すら認められてなかった。言い終える前に女医の言葉によって強制的に切らされた。

「私はさっきも言ったように、あなたの担当医の石田 幸恵よ。

あなたの名前は？」

ようやく説教が終わると、女医は当初の目的だったであろう質問に入った。

「…木戸 ケインです」

俺は素直に答える。

「ケイン君ね。親の連絡先を教えてくださいませんかしら？」

「…親はいません」

そう言うと、

「そう…ごめんなさい」

悲しそうな顔をして言った。

「いえ、もう慣れました」

「…だったら、一緒に暮らしている人の連絡を教えてください」

「彼らも先日死にました」

ほんの少しだけ部屋に沈黙が流れた後、石田先生が口を開いた。

「…分かったわ…それじゃあ、今後の事だけど、念のため検索入院して、明日退院になります」

「はい、宜しくお願いします」

退出しようとする石田先生に

「あの…タバコは…」

「没収よ」

俺は部屋から出て行く石田先生を見送って一息付く。

「なあ、木戸くん」

俺の名を呼ぶのは八神。

「ん？」

その顔は、さっきの石田先生よりも悲しそうな表情だった。

「家族…いないん？」

「ああ。みんな殺されたよ」

気を失うまで一緒にいた家族同然だった同じ隊の戦友達。きっと、俺を貫いたものと同じ爆撃に巻き込まれただろう。

Episode 石田

受話器を耳にあて、十一桁のダイヤルボタンを押すと、コール音

が一定のリズムで繰り返される。

『只今電話に出ることが出来ません。ピーという発信音の後にお名前とご用件を三分以内にお話下さい』

「もしもし、海鳴大学病院の石田です。例の男の子の意識が戻りました。折り返し連絡を下さい」

自らには傷が無かったが、血だらけだった男の子。彼は何かしらの事件に巻き込まれたのだろうと思い、警察に連絡していたのだが、それにしては、彼の精神は安定している。

…あの子には何か事情がありそうね。

3話 青山の思い（前書き）

会話になると一気に地の文が少なくなる（泣）

ジュエルシードよ、我に文才を!!

3話 青山の思い

Episode ケイン

俺が意識を取り戻した翌日、病室で退院の準備をしていると、一人の男が現れた。

「木戸 ケイン君だね？」

声の方を見ると、角刈りの頭髮と無精髭を生やした中年の男が穏やかな表情をし立っている。

「…あなたは？」

俺は警戒心を持ち、聞き返した。すると、青山氏は驚いたような顔をする。が、すぐに穏やかな表情に戻る。

「失礼、私は海鳴警察署の青山っていうんだ。今日はちょっと君の服に付いてた血について聞きたいことがあって来たんだ。お願い出来るかな？」

青山と名乗った警官はしゃがんで俺と視線を合わせて言った。

「…分かりました」

「それじゃあ、まず、何があったか話してくれるかい？」

予想通りの質問が来たので、俺はあらかじめ考えていた答えを言う。

「…それが、何があったのか覚えてないんです」

記憶喪失という手をおおうと思ったが、昨日いろいろと話してしまったので不採用。ショックによる一時的な部分的記憶の欠如という事にした。だが、そうとは知らない青山氏は表情には同情が浮かぶ。

「そうか…もし何か思い出したら私に電話してほしい」

そう言い、俺に電話番号が書かれたメモ用紙を渡してきた。

「もしも私に言いにくかったら、石田先生でも良いから」

最後にそう言うと、青山氏は俺に別れを告げて病室から出て行っ

た。

Episode 青山

参ったなあ、何も分からずじまいだ。

病院の廊下を歩きながら私は考える。最近、この辺りで凶悪な事件が起こったという報告は受けていない。

：木戸 ケイン君、か。名前で調べてみるしかないか。名前から察するに、ハーフだろう。突き止めるのにそう時間は掛からないだろう。

そんな事を考えていたら、病院の玄関に着いた。

さて、次は第一発見者の女の子だな。

「あら、はやてちゃん」

病院を出ようとする、一人の女性の声が耳に入った。はやて：確か、これから会いに行く少女もはやてという名前だったか。

声の出所を見ると、そこには看護師の女性と車椅子に乗った少女が居た。

「どうしたの？今日は検査の日じゃなかったはずだけど」

「今日は木戸君に会いに来たんや」

木戸君の名前が出て来たということは、彼女が八神 はやてで間違いないだろう。

「ちょっと失礼、君は八神 はやてちゃんかな？」

私は二人の会話に割り込んで、少女に話しかける。

「そやけど、おじさん誰なん？」

どうやら間違いないようだ。危うく入れ違いになる所だった。

「私は海鳴警察の青山っていうんだ。木戸 ケイン君を見つけた時の事を教えてくれないかい？」

「木戸くんか。えっと、わたしが家でテレビを見てたらいきなり目の前が光ってな、中からケインくんが出て来たんや。木戸くん血だらけだったから、慌てて救急車を呼んだんよ」

「…それは本当かい？」

私は真剣な顔で彼女の眼を見て問う。

「本当や。きつと、神様がわたしの願いを叶えてくれたんやな」

八神 はやては僕の目をしっかり見て答えた。…弱った。目の前の少女は嘘を言っているように見えない。かといって、目の前にいきなり現れたなんて信じられる訳が無い。こっちも収穫無しか。

「それじゃあ、わたし、木戸くんのところに行くな」

「ああ、引きとめて悪かったね」

八神 はやては私が歩いてきた方に行った。

「ふう、子供はすぐに友達になる微笑ましいものです」

私は残った女性看護師に話しかける。

「そうですね。それに、足が悪くて休学中のあの子にとって、同年代の友達は何初めてですから」

彼女は車椅子の少女に同情するように語った。

「そうでしたか…。それで、願いが叶った、と」

「…それに、はやてちゃんは一人で暮らしてるんです。強がってますけど、やっぱり寂しがつてます。きつと、神様が自分に家族をくれたと思ってるんですよ」

話を聞いて、私は遣り切れない思いになった。

「…木戸君といい、あの子といい、どうして子供達があんな思いをしなくちゃいけないんですかね」

私は手を強く握って言った。

「木戸君、ですか？」

「ええ。彼にも家族が居ないみたいなんです。さっき、彼と話をしてきたんですが、驚かされましたよ。子供と話している気がしませんでした。しかも、私の事を警戒してました。どんな生活を送ってれば、あんな風になるんでしょう…」

3話 青山の思い（後書き）

一週間ぶりの投稿。

これでもいつもよりは早いんですね（笑）

こんな小説を読んで下さった方・評価して下さい下さった方、どうもありがとうございます。

これからも碧河並びに「魔法少女リリカルなのは 次元を超えし願い」を宜しく願います。

4話 逃走者（前書き）

何とか一ヶ月以内に更新出来ました。

4話 逃走者

Episode ケイン

退院の準備、といっても新しい服に着替えるだけなのだが。それが終わった頃、八神が俺の病室を訪れた。どうやら、見送りに来たようだ。

俺達は病室で当たり障りの無い話をしている。

「なあ、木戸くん。木戸くんはこれからどうするんや？家族、居ないんやろ？」

八神が伺うように尋ねてきた。

「とりあえず、住めそうな所を探すよ」

俺は答えると、彼女は嬉しそうに顔を綻ばせる。

「だったら・・・」

矢神が言葉を紡ごうとしたところ、それを遮るように扉を三回叩く音が聞こえた。

「木戸君、ちょっといいかしら？」

部屋に入ってきたのは主治医の石田先生だった。

「はい」

「あなたはこれから児童養護施設、つまり、あなたみたいな子達が集まる所に行くことになるの。外に迎えが来てるから、そろそろ出てもらっても良いかしら？」

そんな事、初めて聞いた。

拙い事になった。施設にはいるには、恐らく手続きが必要だろう。そうなれば、俺がこの国の人間じゃないという事がばれてしまう恐れがある。石田先生や青山氏の話を聞く限り、俺は正当な手段でこの国に入って来たわけではないのだから、密入国扱いになるだろう。

「折角ですがお断りします」

「そういう訳にはいかないのよ。これは決まり事だから」

これは本格的に拙い…。こうなったら、

「八神、じゃあな！」

八神に別れを告げて、俺は走り出した。

「木戸くん!？」

「ちょっと、待ちなさいっ！」

後ろから石田先生が制止を呼びかけるが、俺は止まらない。外に出て、病院から少し離れて、物陰に身を潜めた。無駄に動き回って、行き止まりなどの逃げ場の無い場所に行き着いてしまうのを防ぐのである。

空が少しだけ暗くなってきた。随分、時間がたったし、暫く追手も来なかったので俺は移動を開始する。現在地はどこかの住宅街。早いところこの街から離れて夜を明かす所を見つけない。

「…あかん、どないしよう…」

すぐ目の前の曲がり角の向こうから金属音と共に聞き覚えのある女の子の声が聞こえる。角まで行き、音のする方を見ると、あの車椅子の女の子が車輪を側溝に脱輪させ、立ち往生していた。

「つくづくお前とは縁があるようだな、八神」

俺は彼女の元に歩み寄り、後ろから車椅子の後輪を持ち上げ、側溝から出してやる。

「木戸くん!？」

八神は驚いたように振り返り、俺の顔を見て、

「おおきに、助かったわ」

微笑んでお礼を言った。

「それにしても、縁がある言うて、実はわたしの後を付けてたんちゃうか？」

「……………」

悪戯に微笑む八神の乗った車椅子を再び側溝の方に動かす。

「ああつ、木戸くん、堪忍やーっ」

「ったく・・・」

反省した様なので、側溝の手前で下ろしてやる。

「それじゃあな、気を付けて帰れよ」

俺は八神の横を通り過ぎた。

「あ、待って木戸くんっ」

「今度はどうした？」

呼び止められたので、振り返って八神を見据える。

「木戸くん、住むところ見つかったん？」

その事か…。

「今、夜を明かすところを探してる所だよ」

不安そうに言う八神に俺は答える。

「だったら、うちに住まへん？」

「…そんないきなりお邪魔したら迷惑になるだろ」

「そんな事無いっ」

八神は少しだけ強く言葉を発する。

「でも、家族の人が何て言うか…」

「大丈夫や。うち家族居ないし…」

俺は少し考える。確かにそれは良いかもしれない。ただ、逃走した身としては、出来る限りこの街から離れたい。

「…それに、ここで木戸くんを引き留められなかったら、もう会えなくなるやろ？そんな気がするんや」

その通りだ。この街を離れたらもう二度と戻ることは無いだろう。

「…俺がお前んちで世話になってる事、誰にも言うなよ」

久し振りに同年代の子と連んだからか、今の言葉で情が湧いたのだろう。

「・・・え？」

「条件だ。俺は逃走者だからな」

この街から出て行くのがベストなのだが、俺はこの街に留まることにしたのだ。

4話 逃走者（後書き）

非ユーザーの方の感想投稿を解放しました。
気になる事が御座いましたら、宜しく願います。

5話 象徴と始まり

Episode ケイン

八神の家は結構広かった。一人で暮らすには広すぎるほどに。

「これからご飯作るから、少し待ってーな」

「手伝おうか？」

やはり、足が悪い子に一人で作らせるのは気が引ける。

「ええよ。木戸くんはゆっくりしてて」

が、断られてしまったので、座って大人しく待ってることにした。

目の前に見事な料理が広がっている。俺が見たことの無い料理もいくつかあった。俺が手伝ったら何かしら台無しにしていただろう。

「ほな、食べよう。いただきます」

「いただきます」

八神に続いて、食事の挨拶と思われる言葉を紡ぎ、目の前の黄色い物に二本の木の棒を刺して口に運び、噛み締める。すると、口の中に程良い甘さが広がった。

「・・・どうや？」

伺うような眼差しで八神は尋ねてくる。

「うん、おいしいよ」

俺から素直に感想が漏れた。

「そか、良かったわ。その卵焼き、今日は凄く上手く焼けたんや」
この黄色い料理は卵焼きというらしい。味と名前から察するに、恐らく卵を使っているのだろう。俺の国にも卵料理はあったが、この様な物は無かった。

他の料理もとても美味しかった。

俺は先に食べ終わったので、片付けはやろうと思ったのだが、ま

た八神に止められた。

「木戸くんはゆっくりしてて」

「いや、世話になってる身、そう言う訳にはいかないよ」

「そんなんにせんでええんやけど・・・じゃあ、お願いしてええか？」

「ああ。八神はゆっくり食べてな」

「こういうんはな、こうすると綺麗に落ちるんや」

落ちない汚れがあったので、俺は必死にスポンジを擦っていたら、ちょうど食事を終えた八神が食器を持ってきた。俺が頑固汚れに苦戦しているのを見た八神が俺と交代した訳だ。

「なるほど」

八神からスポンジを受け取ろうと手を伸ばしたら、彼女は別の皿を取り、それを洗い出した

「木戸くんは洗い終わったんを拭いてて。二人でやった方が早く終わるやろ」

結局、スポンジが再び俺の手に渡ることは無さそうだったので、言われた通り拭き作業を始めた。

八神が洗ったのを受け取って拭く。その作業を繰り返していると不意に八神が笑いだした。

「…ふふ」

「どうしたんだ？」

「いやな、楽しいなあと思ってな」

「楽しい？」

「こうやって一緒に何かをする。わたし今まで一人やったから…」

：俺は隊の皆と一緒にだったが、八神はこの広い家に一人で過ごしてきたのだ。

「それに、こんな体で学校も休学してるから友達も居いへん」

友達を招待する事も無かった八神だけの空間。彼女の孤独の象徴。

「だから木戸くんが居る今がとっても楽しいんよ」

そこに俺が現れた事により、その象徴が失われる。

「なあ、俺はずっとここに居てもいいんだよね？」

だから、新たに意味を与えなくてはいけない。もう孤独の象徴に
してはならない。

「勿論や。問題あらへん」

…だから

「なら、俺達は家族だよな？はやて」

今日からこの家は俺達家族の象徴だ。

「…っ!!」

表情が驚きに染まるはやて。ああ、どうやら俺はこの少女の事を
結構気に入っているらしい。

「ああ。当たり前や、ケインくん」

そして、驚きの表情はこれ以上無いほどの笑顔に変わっていく。

「さて、それじゃあ残りを片付けようか」

こうして、俺達の生活は始まったのだった。

E p s o d e 青山

木戸ケイン：

彼の名前は国籍にも在日外国人の中にも存在しなかった。偽名かと思
い、家出を始めとした行方不明者を調べてみたが、彼に該当する
ような人物は存在しない。

「さて、どうしたもんか」

彼は先日病院から逃げ出したらしい。…まずは彼を探さないとい
けないな。

5話 象徴と始まり（後書き）

1話毎の文字数が少ないせいか中々物語が進まない。

予定では、あと2話で原作前が終了。その次の話でヴォルケンズが登場します。

そんなこんなで、これからも付き合って頂けると幸いです。

6話 思考

Episode ケイン

はやての家に住み着いてから六日目の今日、はやてが図書館へ行くというので、俺はそれに付いて行く事にした。

はやての車椅子を押しながら図書館の入り口を潜り、彼女の示す方に行く。

「ケイン君、あの本と取ってくれへん？」

目ぼしい本を見つけたのか、はやては上の段の本を指差して言った。

「これ？」

「そや」

俺は指定された本を取って、はやてに渡す。

「ありがとな」

すると、彼女はいつものように微笑んでお礼をいった。

その後もいくつか、はやての指定する本を取ってあげる。彼女の選んだ本は絵本や小説だった。数冊取った所で彼女が口を開いた。

「ケイン君は何も読まへんの？」

「俺ははやての後で良いよ」

「わたしはこれをその机で読んでるから、ケイン君は好きなところとええ」

はやては俺が取ってあげた本を見せてそう言うので、俺はお言葉に甘えることにする。

「分かった。それじゃあ、行って来るよ」

車椅子を机の元に持って行って、俺は一旦はやてと分かれた。

俺は本棚の前で世界地図帳を見ている。今、開いているのは世界

全域のページである。しかし、そこには我が国、クラント公国が描かれていなかった。それだけでなく、このような地図は見た事が無い。まさか、世界その物が俺の住んだ物とは違うのか？いや、ありえない。だが、これは俺の知っている地図とは全くの別物。

俺はこんがらがる思考のまま、はやての元に戻った。

「なあ、浮かない顔してどうしたん？」

図書館からの帰り道、ふとははやてが尋ねてきた。

「いや、何でも…」

「何でもあらへんやろ？」

何でもないと言えようとしたら、はやての言葉に遮られ、否定された。

「話とう無ければ話さなくてええ。せやけど、そうで無いなら、誰かに話すだけでも楽やで」

「…もしかすると俺はこの世界の人間じゃ無いかもしれない」

信じてもらえるかは別として、言っても問題ないだろうと思い、はやてに話した。

「え、違うんか！？」

ところが、はやてはそんな風に驚いて聞いてきた。おい、驚く場所はそのなかか？

「ちよっと待て。はやては俺が異世界人だと思っていたのか？」

「だって、光の中から出て来たゆうたら、異世界から来たんやろ？本だとみんなそうやよ？」

…確かに光の中から出て来たってだけでも異常な事だろう。だから、その異常によって異世界に飛ばされるという異常が起こっても不思議ではないのだ。いや、不思議ではあるのだが…あれ、また頭がこんがらがってきた。いや、そんな事はどうでも良いんだ。この思考は放棄しよう。

「はあ…。本の事はともかく、そうなのかもしれない」

とりあえず認めよう。俺、木戸ケインは異世界人だ。

7話 忘れられない笑顔（前書き）

試験も残す所あと一科目。

試験勉強の合間を縫って書いてたら、何か1話書きあげたので、アップします。

因みに：

…今季絶望的orz

7話 忘れられない笑顔

Episode ケイン

6月に入って間もない日の昼下がり。はやてと二人で臨海公園を散歩していた。

「海風が気持ちええな」

「段々暖かくなってきたからな。昼頃はここに来れば快適だな」
今は海と公園を遮る柵の所に車椅子を止め、海を眺めている。

「そういえば明日ははやての誕生日だよな。何か欲しい物あるか？」
先月、はやてがカレンダーに花丸印を付けていたので、何の日か聞いたら、その日ははやての誕生日らしい。

「別に何もいらへんよ。その変わり、一緒にパーティーしような」

「：そうか。何か欲しい物が見つかったら言えよ」

「わたしが望んでたんはもうあるから、もう何もいらへん」

そう言って、海に向いてた目線を俺に向け、微笑みかける。

彼女が欲しかったもの。それは家族。いつか言ってた。わたしの願いを神様が叶えてくれたって。

「はあ：」

まあ、本当に無さそうだから仕方がない。自分で選ぼう。

俺達は再び海に視線を向けた。

はやての家で世話になる事になって半月程経つ。やはり俺ははやての事を気に入っているらしい。同年代の女の子は久しぶりだ。それに、彼女は俺と同じ境遇の人間。そして、お互い、家族が欲しいと願っていた。これがきつと大きいのだろう。半年一緒に暮らした今、はやてに対して何というか、情が湧いている。二人で皿洗いするもの、こうして散歩するのも楽しい。出来れば、明日、何かプレゼントして喜ばせてやりたい。

そんな事を思いながら、俺は海を眺めていた。

夕刻、帰り道の事だ。

「木戸君」

後ろから声を掛けられる。振り向くと、そこには一度だけ会った事のある人物が立っていた。

「…どうも。青山さん」

誰かに警戒心を抱くのは久しぶりだ。相手はこの世界を取り締まる存在。きっと、俺が逃げ出したのも知っているだろう。

「私はこういう者だよ。ちょっと木戸君を借りていくけど、良いかな？」

青山氏は警察手帳をはやてに見せて言った。

「あの…ケインくんはどうなるんですか？」

俺の警戒心を感じ取ってか、心配そうに聞き返すはやて。

「大丈夫。ちょっとお話するだけだから」

「…分かりました。ケインくん、先帰ってるな」

「…ああ」

先に帰るはやてを見送り、青山氏に視線を戻した。

「ここで立ち話もなんだ。ちょっと歩いた所の喫茶店に行こうか」

「…はい」

青山氏の後に続き、移動を開始した。今回は逃げる訳にはいかない。はやてに迷惑はかけられないから。

「さあ、何でも好きな物を頼みなさい。お金の事は気にしないで
良いよ」

「いえ、結構です」

そう言うと、青山氏はコーヒーとお勧めのジュースを、とウエー

トレスに告げた。

「さて、君の事を色々調べさせてもらったよ」

ウェートレスが去ったのを確認し、彼は話し出した。

「さて、君の事は色々調べさせてもらったよ。だけど、何も分らなかった。君が石田先生に言ったような事件も調べたんだが、一致する事件、そして君の様な事件関係者は存在しない。それどころか国籍すら無かった」

青山氏がここまで話した所で、コーヒーとジュースが運ばれてきた。彼はコーヒーを飲んで一息付く。

「：それで、俺はどうなるんですか？」

「うーん、君が何者なのか。現在、考えうる限り二つ。一つが、君が亡命者であり、日本に密入国した。もう一つが、君がスパイだって事だ。だけど、それにしても君の立ち回りは不自然だ。君の存在は浮いている。結局、何も分からない。保護して施設に送るのが妥当な処置だろうな」

「：そうになると、はやてとは：」

「一緒には居られなくなるだろうね」

俺は拳を握りしめ、俯いた。

「だから、君を私の養子として戸籍登録しておいた」

「：は？」

青山氏が藪から棒な発言に、俺は呆けてしまった。

「さっきの子をまた一人にするのは忍びない。それに、あんなに寂しい目をしてた君がこんなに変わったんだ。君達二人を離れ離れにするのは尚忍びない。だから、色々と手を回させてもらったよ」

青山氏の言葉に俺は引っかけかりを覚えた。

「ちょっと待って下さい。ってことは、青山さんは俺の事を…」

「ああ。暫く観察させてもらったよ」

俺は顔を引きつらせた。何せ、そのような気配は一切感じなかったのだから。

「ふふふ。正体不明の君に一つ忠告しておこうか。日本の警察は嘗

めても私の事は見くびらない事。君がどんなに強かろうと、ね」
そう語った青山氏の笑顔を俺は忘れないだろう。

8話 黒装族（前書き）

予告通り、ヴォルケンズ登場です。

8話 黒装族

E p i s o d e はやて

ケインくんと別れた後、わたしは図書館に寄った。何だか、今の気持ちで家に一人でいるのは嫌だったからだ。ケインくんはきつと帰ってくる。でも不安だった。ケインくんは病院から逃げ出した。そしてさっき、警察が表れて彼を連れていった。

図書館が閉館になり、あたしは図書館から出ていった。好い加減、彼ももう帰っているだろう。もしかしたら、わたしを心配してるかもしれない。

二十一時を回った頃、私は帰って来た。だけど、ケインくんはまだ帰って無い。

電話の前に行くと、留守電が入っていた。私は再生ボタンを押す。案内のアナウンスが流れた後、電子音が鳴り、メッセージが流れる。

『もしもし。海鳴大学病院の石田です。えっと、明日ははやてちゃんのお誕生日よね。明日の検査の後、お食事でもどうか、とお電話しました。明日、病院に来る前にでもお返事くれたら嬉しいな。よろしくね』

再び静かな家に電子音が鳴り響く。唯一の音源である電話の音が、現在、自分が一人である事を強調させる。

「…ケインくん……」

その搾り出た寂しそうな声に答える人物は居ない。

「ただいま」

が、直後、その人物は帰ってきた。

E p i s o d e ケイン

俺はまたこの家に帰ってくる事ができた。と、感動するのも束の間。歩を進めると電話の前で震えているはやてが目映った。

「…ケインくん？」

「はやてっ！？どうしたんだ？」

俺ははやての元に駆け寄る。すると、はやてが車椅子に座ったまま腕を俺の腰に回した。

「…もう帰ってけえへんかと思った」

確かに帰るのが遅くなりすぎたかな。別れた時があんな感じだったから、心配させたかな。俺ははやての頭を撫でてやる。

「いや、済まないね。ちょっとケイン君を引きとめ過ぎちゃったかな？」

そう言葉を発したのは、玄関にいう青山氏だった。

「あ、すみません。：はやて、遅くなってごめん。あと、ちょっと話があるから、上がってもらって良いかな？」

そう言っちはやてに青山氏の姿を確認させる。すると、彼女の表情は再び不安に染まった。

「大丈夫だよ」

そう言うと、少し安心した様子を見せる。

「待たせてしまって すんません。どうぞ上がって下さい」

はやてはそう言って、青山氏を招き入れた。

俺達三人がいるのは家のリビング。俺の横に青山氏、正面にははやてが座っている。

「結論から言うと、この人が俺のお父さんになった」

思考が追いついていない様子のはやて。まあ、当然だろう。俺は続けて事の成り行きを説明した。

「そか：ケインくんはこれからどうするん？」

はやての表情が再び曇る。

「今まで通りだよ」

「ほんまか？」

「ああ」

「…良かった」

安心して完全に気が抜けたのか、はやては背もたれに寄りかかりぐったりとした。

「そんなこんなで、これから宜しくね。はやてちゃん」

「はやて、これからもよろしく」

それから、俺達は三人で暫く話をしていた。

青山氏が帰ってから、俺とはやては二人で話をしていたが、もういい時間なので、はやての車椅子を押し、彼女の部屋に向かっている。

「それにしても、青山さん。良い人そう良かったな」

「ああ。あの人にはもう頭があがらないよ」

部屋の扉を開け、中に入った。はやてをベッドに移しながら時計を確認すると、あと十秒ほどで日付が変わろうとしている。

「はやて」

車椅子の後ろに掛けていた袋からプレゼントを取りだす。ここが一番のはやての死角だった。実を言うと、今日帰るのが遅れたのは、青山氏とプレゼントを探してたからだっったりする。

「なんや？」

再び、時計を見る。

3・2・1…

「はやて、誕生日おめでとう」

袋をはやても目の前に出した瞬間、背後が光りだした。振り向くと、そこでは鎖で巻かれた本が紫の光を放っている。

本が光りだして間もなく、強い地震が起こった。

その本はひとりでに宙に浮く。鎖が壊れ表紙が開き、次々とページがめくれていった。

俺は怯えるはやてを後ろに庇い、本と対峙する。

《Ich entferne eine Versiegelung (封印を解除します)》》

最後のページがめられると、再び勝手に閉じられ、俺達の目の前に降りてきた。

《Anfang (起動)》》

本の中心から強い光が発せられる。すると、今度ははやての胸の前に光の玉が表れ、本に近づいて行くと、今までで一番強い光を発した。

俺は前を見る事が出来ない。最後に確認したのは紋章の様なものだった。

光が収まり、前を向くと、目の前には宙に浮かぶさっきの光の玉と本。それと、跪く黒装の男女四人が居た。

「闇の書の起動を確認しました」

「我ら、闇の書の収集を行い、主を守る守護騎士めに御座います」

左二人、桃色の髪的女性と金髪的女性が一人ずつ語る。

「夜天の主の元に集いし雲」

「ヴォルケンリッター。何なりとご命令を」

右から二番目の銀髪褐色肌の男、一番右の赤髪の少女の順に続いた。

何なんだ？こいつら。どうやら、こちらに危害を加えてくる様子は無い様だ。夜天の主：はやての事か？

俺は視線をはやてに向ける。

「っ！？はやてっ、おいっ」

はやては目を覚まさない。胸に耳をあてると、心音はちゃんと聞こえる。

「…チッ。おい、お前らの主が気を失った。病院に運ぶから、お前

らはここで待ってろ」

多分、過度の恐怖と驚愕で気を失っただけだと思うが、状況が状況だ。確定は出来ない。はやてを横抱きにして駆けだそうとすると、「待て。お前の正体が分からない以上、主と二人にする訳にはいかない」

そう言い、桃色の髪の女性が立ち上がって俺を見据えた。

「なら付いて来い。邪魔するなら、お前らを無力化する」

俺も彼女を見返す。

「…いいだろう。だが、妙な真似をしたら容赦しない」

はやての誕生日の始まりは波乱に満ちていた。

9話 原作とほぼ変わらないのは、作者の手抜きじゃありません（前書き）

今までに無いくらいのハイペース更新ではないだろうか。

しかも、1万Hit記念も8月1日にすでに書きあがったという（笑）

9話 原作とほぼ変わらないのは、作者の手抜きじゃありません

E p i s o d e はやて

今日、目を覚ましてまず視界に捉えたのは、いつもの見慣れた天井では無かった。とりあえず、わたしは体を起こす。

「はやてちゃん。良かったわ、何とも無くて」

そう言って歩み寄って来たのは石田先生。

「えっと…すみません」

何だか良く分からないけど、そんなやり取りの後、私達二人は微笑みを交わした。

「で、誰なの？あの人たちは」

「ん？…あ…」

石田先生の指差した先には、ケインさんと昨日わたしが気を失う前に現れた四人が、病院の男性職員に囲まれ、居心地が悪そうに立っている。

「ケインさんの事は青山さんって人から聞いたけど、他の四人はどういう人たちなの？」

そう先生に問われ、わたしはどうしたものか考える。

E p i s o d e ケイン

「ケインさんの事は青山さんって人から聞いたけど、他の四人はどういう人たちなの？」

昨日、青山さんに電話して、俺の事は説明して貰ったが、この四人の事は別だ。

「だからこの人達ははや…」

「ケインくんは静かにしてて」

闇の書とか、守護騎士だとか言い出すものだから、彼らの事は、はやての親戚だと俺が石田先生に説明した。だが、石田先生はその真相を確かめようと、はやて本人に聞いたのだろう。これは非常にまずい。

はやて、親戚だって誤魔化すんだっ…。俺は心の中で念じる。

「変な格好してるし、言ってる事は訳分かんないし。どうも怪しいわ」

自称守護騎士の黒装族。確かに怪しい事この上ない。

「あー、えっと、その、何と言いましようか。え、ああ…」

はやてはどうした物かと困った様子だ。俺は石田先生に嘘がばれた後の事を考え、遠くを見つめる。

「え、ええ…」

はやてが何やら戸惑っている様子。そして、暫し沈黙が流た。

沈黙の後、はやてが口を開いた。

「えっと、石田先生。実はあの人達、わたしの親戚で…」

よしっ、ナイスだはやて。

「親戚？」

石田先生は語尾を上げて聞き返す。

「遠くの祖国からわたしのお誕生日をお祝いに来てくれたんですよ」
はやての言葉に石田先生は顎に手を当て、考える仕草をした。尚もはやての説明は続く。

「それで、ビックリさせようとして仮装までしてくれてたのに、わたしがそれにビックリしすぎてもうたというかその、そんな感じで…なあ」

はやては最後に、こっちに話を振ってきた。

「そうなんですよ」

「その通りです」

金髪の女性と桃色の髪の女性が話を合わせる。そして、はやては乾いた笑い声を出すのだった。

帰宅後、はやては彼女の部屋で四人から事情を聞いた。俺は隅で話を聞いている。

因みに、彼らの名前は、桃色の髪で鋭い目をした女性がシグナム、金髪の柔らかい雰囲気女性がシャル、銀髪で褐色肌の目が鋭い男性がザフィーラ、最後に赤髪で釣り目の少女がヴィータだ。

「そうか。この子が闇の書つてもんなんやね」
この子とは、昨日の本である。

「…はい」

四人を代表してシグナムが答えた。この人が将らしい。

「物心付いた頃には、棚にあったんよ。綺麗な本やから、大事にはしてたんやけど…」

「覚醒の時と眠っている間に闇の書の声を聞きませんでしたか？」

「んー、わたし魔法使いとちゃうから、漠然とやったけど…あ、あった」

はやては引き出しの中から何かを取り出した。

「分かった事が一つある。闇の書の主として守護騎士皆の衣食住、きっちり面倒見なあかんゆうことや。幸い住むところはあるし、料理は得意や。皆のお洋服購^こてくるから、サイズ測^こらせてな」

そう言っつて、さっき引き出しから出したと思われる巻尺を引っ張る。

そんなはやてを見て、守護騎士達は皆 咂然とし、俺は若干呆れるのだった。

サイズを測り終えたはやては早速、買い物^{もの}の準備に取り掛かる。

「ケインくんは皆と留守番しててな」

はやては一人で行くつもりらしい。

「一人で大丈夫か？」

「大丈夫や。ケインくんが来るまでわたし一人やったんよ？ほな、行って来るな」

はやての気配が家から消え、俺は守護騎士たちと共にここに取り残された。

「ケイン殿」

俺に声を掛けたのはシグナム。

「ケインで良い。お前の方が歳は上だろ」

「いや、そういう訳にもいきません。ケイン殿は主の御家族ですから。そうとは知らず、昨晚は無礼を…。申し訳御座いません」

そう言い、頭を下げてきた。

「その事はもう良いよ。ただ、はやての事だから、お前らの事を新しい家族としか思っていないと思うぞ。だから、主の家族だとか、そんなの気にする事は無いと思うぞ」

「しかし…」

シグナムは困ったような顔をする。

「まあ、その内、はやてから話があると思うぞ」

後日、俺の予想通り、はやてからそこら辺の指導が入ったのだった。シグナムだけは呼び方を改めなかったが。

9話 原作とほぼ変わらないのは、作者の手抜きじゃありません（後書き）

「購^こてくる」って字、多分間違^{まちが}ってるんだろぅなあ…

一万H*i*t記念 嘘予告「魔法少女リリカルなのは 〔電腦世界の追放者〕」

PV一万アクセス達成!!!!

読んで下さった皆様、本当に有難う御座います。

これからも「魔法少女リリカルなのは 次元を超えし願い」及び碧河を宜しく願います。

では、一万H*i*t記念の嘘予告をどうぞ。

魔法少女リリカルなのはとロックマンエグゼ3のクロスオーバーです。

一万Hit記念 嘘予告「魔法少女リリカルなのは 〔電脳世界の追放者〕」

——気が付いた？

…誰かが俺に話しかけてくる。

…目を開けると、そこには金髪の少女が立っていた。

——体の方は大丈夫？

ッ！？誰だっ！！…クッ……

…慌てて体を起こすと、体に痛みが走る。

——何やってるの！！まだ寝てなさいっ。

…少女は俺を無理矢理寝かした。

——私はアリサ・バニングスよ。あなた、名前は？

………

…俺は黙秘する。

——はあ。まあ良いわ。暫く休んでなさい。

…扉が閉まる音と共に、この部屋から彼女の気配が無くなった。

記憶を失った電腦世界の追放者は、別次元の地球に飛ばされた。

彼は過去、心に深い傷を負い、それは憎しみへと変わった。

それは時が経っても、記憶を失っても尚、癒える事は無かった。

そんな歪を癒したのは…

…飛ばされた先で出会った一人の少女だった。

何時しか追放者は少女に心を開くようになった。

彼女と笑い、悲しみ、そして時には少女を守った。

だが、そのような時間は、永遠には続かなかった。

…全て思い出した…

…人は俺を捨てたんだ…

…人は俺を裏切ったんだ…

追放者は記憶を取り戻した。

彼の憎しみは再び湧きあがる。

：俺は、人を許さない。

追放者は怒りに任せ、海鳴の地で暴れる。

町は炎に包まれ、人は恐怖し、混乱した。

自衛隊は何の役にも立たず撃墜。

追放者を止めようと、必死に叫ぶ少女。

だが、その声は追放者に届く事は無かった。その姿は追放者の目に映る事は無かった。

混沌と化す海鳴の町。

遂に追放者の前に、時空管理局員が現れる。

それは、三人の少女だった。

海鳴の空に四つの影が舞い乱れる。その影からいくつもの光が放たれた。

戦況は追放者が若干優勢だが、少女達の負けを臭わせるものは一切無い。

膠着状態は長く続いた。

激しい戦いの末、双方の全力の攻撃がぶつかり合う。

——スターライト……

——プラズマザンバー……

——ラグナロク……

ブレイカー……ッ……!!

……バニシングワールド

碧河がプレゼンする感動作「魔法少女リリカルなのは」
「……電脳世界の追放者」

近日、連載開始………しないよ（笑）

一万H*i*t記念 嘘予告「魔法少女リリカルなのは 〔電腦世界の追放者〕」

はい。連載しません。嘘予告ですから（笑）

10話 試験勉強と棒と説教（前書き）

我が家よ、私は帰ってきたーーーーッ!!!!!!

10話 試験勉強と棒と説教

Epispe ケイン

はやての誕生日後、最初の水曜日。俺は青山氏に呼ばれた。

この国には義務教育というものがあるらしい。そして、俺はその法の元、学校という教育機関に通わなければならないとの事だ。

「僕はここが良いと思うんだ。設備も充実だし、何より教員の質も良いし」

俺は現在、青山氏一押しの学校のパンフレットを見ながら説明を受けている。

「そうですね。他の所と比較しても全然違いますね」

「そうだろ。気に入ってくれたかな？」

他の学校と比較しても、青山氏の言う通り高水準だ。ただ…。

「でも、費用も相当違いますね」

学費も高水準である。

「そこら辺の事は気にしないでくれ。この位の学費を払う余裕はあるから」

「…分かりました。色々と済みません。宜しく願います」

こんなにもお世話になるのも忍びないと思うが、青山氏本人に強く勧められたので、俺はこの行為に甘えてみようと思う。

だけど、どんどん借りが増えていくなあ。俺はこれを返しきれるのだろうか。

「よし。それじゃあ、とりあえずこの問題を解いてみて」

そう言って、青山氏が出したのは、編入試験の過去問題だった。

「おかえりなさい、ケインくん」

帰ってきた俺を出迎えたのは、柔らかな雰囲気を纏った金髪ショートトの女性、シャルダ。

「あ、ケインくん。おかえり…って、何やそれ？」

少し遅れて俺の目の前に現れた蒼眼でストレートの栗色ショートヘアをした少女、はやては俺が右手に提げた、本の沢山入った袋を指して言った。

「ただいま。青山さんに貰ったんだよ。詳しくはこれから話すよ」

晩御飯を食べた後、俺は学校の事をみんなに話した。

因みに、過去問題を解いた結果は、国語と数学は完璧。英語と社会は壊滅的であった。理科は生物以外はそれなりに出来た。

つまり、得意教科と苦手教科の差が激しいのだ。つい最近知った国の歴史、未知の国の言葉なんて知ってる訳が無いのだ。

そこで、青山氏から沢山の英語と社会の教材と、少しだけ理科の教材、そして十年分の編入試験過去問題集を授かってきた。十年分と言うと多すぎかと思うかもしれないが、編入試験、しかも五年生と絞られるので、少ないくらいなのだ。その分、苦手科目を何とかしろという事だろう。

午前一時四十分。現在、早速英語の勉強中である。

元々、語学は得意なので、あまり苦戦していない。もうアルファベットの発音、第一文型から第三文型、代名詞やbe動詞といった基本的な単語は習得した。

コンコン。

扉を軽く叩く音が部屋に響く。

「ケインくん、わたしや」

「ああ。入って良いぞ」

そう言うと、扉を開けてはやてが入って来た。

「まだ起きてるんか？」

「ああ。試験まであまり時間がないからな」

そう言うとはやては苦笑を浮かべた。

「あんまり遅くまでやってると体壊すで。無理せんといてな」

「ああ。気を付けるよ。でも、今日はもう少しやるよ」

「そか。頑張ってな」

はやては部屋から出て行った。ちょうど良いので、少し休憩しよう。

俺は机を開き、奥から手のひらサイズの箱を取り出し、窓辺に行く。腕を棧に乗せて身を外に乗り出し、箱の中の十センチにも満たない棒を咥えて火を着けた。そのまま空気を吸い込み、棒を手にとって、息と共に煙を吐き出す。暫くそれを繰り返していた。

すると、棒が四分の一程燃えた所で、背後の扉が開いた。

「ケインくん。お茶入れたで。これ飲んで：」

はやての声がゆっくりと消えていった。持っていたお盆を置き、

無言で車椅子を操作し、俺の手から棒を奪い取る。

「：灰皿はどこや？」

俺は反射的に携帯灰皿をはやてに渡す。はやてはそれを受け取り、まだ四分の三も残ってた棒の火をそれで消し、中に入れた。ああ、勿体ない…。

「ケインくんっ。煙草は吸っちゃ駄目やって言っただろっ！」

こうして、はやての説教が始まった。勿論、煙草は全て没収された。

説教が終わると、はやては急須からお茶をマグカップに移し、俺に差し出してきた。

「少しぬるくなってもうたけど、これ飲んでな」

俺はそれを受け取ると、一口飲んだ。俺がさっき“もう少し”と

言ったからか、入っていたのは焙じ茶だった。

「ほな、頑張ってな」

やんわりと言い、はやては部屋を出て行く。

「…もう少し頑張るか」

俺はマグカップを机の上に置き、再び机に向かった。

10話 試験勉強と棒と説教（後書き）

誤字報告・感想・駄目出し・誤字報告・誤字h…お願いします。

誤字を見つけて落ち込んでる碧河でした。

11話 入学試験と騎士甲冑（前書き）

…ようやく書き終わった……………

11話 入学試験と騎士甲冑

Another View

学校には夏休みというのがある。授業の区切りが付き、新たな生活の準備などの時間を確保出来るため、この時期に編入試験を受けるのがほとんどだ。

それは青山 ケインも例外ではない。とある一室に少年が一人、真ん中の一番前の席で筆記用具と机の端に並べ、目を閉じて座っている。

八月某日、彼は編入試験を受けるために私立聖祥大学付属小学校という場所を訪れていた。

Episode ケイン

扉を引く音が聞こえる。扉を開けた主が目の前にあるこの部屋で唯一向きが逆を向いている机にやって来た。それは、茶色の封筒を抱えた齡三十は迎えたであろう男性だった。

「青山 ケイン君でいいかな？」

「はい」

「それじゃあ、これが解答用紙ね。まず国語から始めるから、先に受験番号と名前を書いてちょうだい」

そう渡されたのは、枠だけが書かれた紙だった。

俺は言われた通りに指定されたものを書き込む。

「次に問題の冊子ね。開かないで、表紙に書いてある注意事項を読んで待ってて」

表紙に書かれているのは、

・ 回答時間は40分。

・試験中の途中退出は緊急事態を除き、原則認められない。
・カンニングが発覚した場合、その科目と、それまで受けた科目は0点となる。また、その後の科目の受験できなくなる。
との事だ。

「それじゃあ、始め」

男の合図で試験が始まった。

学科試験が終わると、隣の部屋で面接試験があった。面接官は三人。俺から見て左には、さっきの筆記試験の時の試験官が座っている。

真ん中の人が出す質問に俺は問題なく答えていく。

「それでは、異常で終わりです。お疲れさまでした」

「ありがとうございます」

「青山君、ちょっと良いかい？」

筆記試験を行った部屋で帰りの支度をしていると、扉が開き、呼ばれた。

視線を向けると、筆記からいた試験管がこちらに歩いて来た。

「今日はお疲れ様」

「ありがとうございます」

「予定では僕が担任になるから。これからよろしく！」
と陽気に言う。

「合格するかまだ分からないですから、気が早いですよ」

正直、英語と歴史がどれだけ足を引っ張るか。

「大丈夫。さっき数学と国語をざっと見たけど、完璧だったよ」

…こういう事を言っても大丈夫なのだろうか…。

「でも、苦手科目がどう響くか：」

「あれ？この合格基準は読まなかったの？」

俺の言葉に、担任になる予定の男は不思議そうに言う。

「はい」

「この合格基準は五十点以下の科目が無く、五科目の平均点が七十点以上採るか、三十点以下の科目が無く、どれか二つが九十三点以上採れば合格。青山君は二つ目の方がOKだから、筆記は問題ないよ。面接の方も中々印象よかったしね」

自分の思わぬ所で合否が分かったことと、そんなことは聞いていないという二つの意味で、俺はしばらくポカンとするのだった。

青山さんに問いたですと、毎年それを狙って落ちる奴が必ずわんさか出るから言わなかった。それに、得意科目以外は疎かにするなんてとんでもない。との事だ。そう言われると何も言い返せない。

「ふふっ、それは青山さんにしやられたなあ」

はやては笑いながら言う。

「全くだよ。ほんと、あの人は侮れないよ：」

青山氏には一生敵わない気がする。そんな事を思いながら、皿をはやてから受け取る。

「これで最後やな」

俺は洗われた皿を受け取り、それを拭く。いつもの光景である。俺が最後の食器を閉まった所で、一緒にリビングに戻る。

「そうそう。明日、デパートに行くんやけど、ケイン君も来る？」

「そうだな：試験も終わったし、行くかな」

ここの所、勉強漬けだった為、はやてと出かけるのも久しぶりになる。

「うん、決まりや」

はやては嬉しそうに笑う。

「ところで、何を買うんだ？」

「シグナムとシャマルが騎士甲冑が欲しいからイメージして言うから、ちよつとそれっぽい物を見に行くんや」

：はやての言葉に俺は少し思案する。甲冑が必要になる、という事だろうか？

俺はザフィーラを撫でに行ったはやてに目をやる。

「：ちよつと外に出てくる」

そうはやてに告げて歩きだした。

「：あ、ケインくんっ」

はやてに呼び止められたので、歩を止め、再び彼女に目を向ける。

「たばこ吸ったらあかんで？」

ジト目で俺を見て言った。

「：分かってるよ」

「ほんまか？ケインくん、何度言っても言う事聞いてくれへんし…」
疑うような表情ではやては俺を批難する。

「大丈夫だ」

そう言って、再び足を動かした。正面にはシグナムとシャマル。

「ちよつと庭に出て来てくれ」

二人の傍を通る時、他には聞こえない様に歩いたまま呟いた。

空を見上げると、星が出ていた。そう言えば、理科の試験に星座なんて出たっけ。俺は空から目を逸らす事なく、ひたすら星と星を結んでいる。

「お待たせしました」

上に向いていた視線を声のした方に移すと、そこに居たのは目と同じく鋭い雰囲気醸し出す桃髪ポニーテールのシグナムと、柔らかな雰囲気纏った金髪ショートヘアのシャマルであった。

「あの：話はいったい…」

そう発したのはシャル。二人とも緊張している。

「単刀直入に聞く。甲冑がいるって事は、お前らは近い内に動き出すのか？」

そうになると、はやても危険になってくる。

「主が望むのであれば」

答えたのはシグナム。

「はやてはそんな事望みはしないっ」

不覚にも少しだけ声を上げてしまった。

「でしたら、私達が動く事はありません」

シャルは不安そうに、だけどはっきりと答える。

「そうか：分かった。すまない」

俺は一息付く。すると、

「ケイン殿。こちらからも一つ聞いてよろしいでしょうか？」

シグナムがそう言ってきた。

「ああ」

「ケイン殿の立ち居振る舞い、どれを取っても隙が全く無い。あなたは何者なのですか？」

：やはり、気付いたか。

「：ただの元兵士だよ」

「ただの元兵士にしては隙が無さ過ぎるし、何よりあなたは若すぎる」

シグナムは俺の答えに間髪いれずに、突っ込む。その目と視線はいつにも増して鋭い。

「……元兵士って事を含めて、これから言う事は誰にも言うなよ。勿論、はやてにもだ」

俺はこの世界で初めて自分の身の上話をした。

11話 入学試験と騎士甲冑（後書き）

お受験なんて碧河は全く知らないので、好き勝手書かせて頂きました（笑）

…本当はちゃんと調べないといけないんですけどね（汗）

12話 その名は、ヴォルケンリッター、ヴィータ（前書き）

今回は早めの更新

12話 その名は、ヴォルケンリッター、ヴィータ

Episode ケイン

デパートの一角に“といざるす”というおもちゃ屋がある。俺達は今、そこを訪れている。ちなみに、シグナムとザフィーラは留守番である。

「ここは…」

はやての乗った車椅子を押しながら不思議そうに言った。

「ええからええから。こういう所にこそそれっぽい材料が、なあ」
「なるほど…」

俺はヴィータと一緒に後ろから着いて行き、二人の話を聞いている。と、ヴィータは何かを見つけたようで、それに近づいて行く。

「ヴィータちゃん、どうしたの？ヴィータちゃん？」

シャマルはヴィータに気付き、彼女に問うが、ヴィータは目の前の物に夢中で、それが聞こえていない様子。

はやてはそんなヴィータを見つめる。

「これか？」

俺はヴィータの視線の先にあった兎の縫いぐるみを手に取り彼女に聞いた。

「あっ」

彼女の反応を見て、これで合っていると確信する。

「はやて。これ買っても大丈夫か？」

少し離れた所にいるはやてに俺は尋ねた。

「大丈夫や。会計するから、ちょい貸して」

俺がはやてに渡して会計を済ます。この間、ヴィータに何か言う隙を与えなかった。

夕暮れに染まる帰路を、俺達四人は歩いている。

「良い風ですね」

「ほんまや」

「お天気も良いですし」

「絶好のお散歩日和やなあ」

相変わらず前を歩いているはやてとシャルマルがまったりと会話しているのを、俺は相変わらずヴィータと後を着いて歩きながら二人の会話に耳を傾けていた。

横に居るヴィータは、前に抱えている縫いぐるみの入った紙袋を見つめながら歩いている。

「ヴィータ」

はやてが呼ぶと、彼女は歩みを止め、顔を上げた。

「もう袋から出してもええで」

その言葉を聞くと、ヴィータは慌てて袋から縫いぐるみを取り出す。すると、彼女の顔に満天が広がった。

「はやて、あり…」

ヴィータはお礼お言おうとしたが、前の二人はもう歩き出した。

俺はヴィータの頭に手を置き、

「ほら、行くぞ」

と促す。すると、

「あたしは子供じゃない」

と抗議した後、

「…ケイン、ありがとう」

と言って、前の二人を走って追いかけて行く。

俺はその後を歩いて追いかけるのだった。

くさすがに短すぎるので、おまけく

夜、晩御飯を食べ終え、ソファで休んでいる。はやてとシグナムは窓から庭に出て、何やら話をしている。耳を澄ませば盗み聞きする事も出来るが、それは止めておく。

「はやてー！」

そこにヴィータが走って行った。

「おお、どないした？ヴィータ」

「はやて、冷凍庫のアイス食べて良い？」

「…お前、夕食をあれだけ食べてまだ食うのか？」

ヴィータの言葉に呆れるようにシグナムは言う。それもその筈。

ヴィータはあの体で一人だけおかわりを三回していた。

「うるせーな、育ち盛りなんだよ。はやてのご飯はギガウマだしな」ムスツと反論した後、夕食を思い出したのか。幸せそうな顔をするヴィータ。

確かに見た目は育ち盛りだが…。だがヴィータよ。お前、さっきは子供じゃないって言ったろ。まあ、実年齢は大人どころかいババアなんだが。

「じゃあないなあ。ちょっとだけやで」

「おー」

はやての了承を得ると、良い笑顔で元気よく返事をし、走って冷蔵庫に向かう。…ヴィータよ、どっからどう見ても子供だぞ。

コナン風に言うなら、“見た目は子供、頭脳も子供、だけど実は大人（それもいいババア）。その名は、ヴォルケンリッター、ヴィータ”である。

13話 別にフラグは立っちゃいません（前書き）

タイトルを「魔法少女リリカルなのは 次元を超えし願い」から「魔法少女リリカルなのはA・S 次元を超えし願い」に変更しました。

13話 別にフラグは立っちゃいません

Another View

9月1日。世間は夏休みが終わり、約一ヶ月もの間、静寂に包まれていた教室に、元の喧騒が戻る。

一つ、夏休み前と違う所といえば、その喧噪の中に青山 ケインが加わる事である。

朝のホームルーム。ほとんどの生徒は皆教室で待機している中、青山 ケインは教師の後を着いて歩いていた。

手には夏休みの内に用意された教科書が入った紙袋が提げられている。教科書が用意されてないから、隣の女の子に机を寄せて見せてもらうなんてイベントは無い。

Episode ケイン

学校初日、職員室で担任と合流して、現在、教室に向かっている。担任は編入試験の日に話をした男だった。歩きながら、軽く言葉を交わす。

教室の前に着くと、担任からここで待つように言われた。

担任は一人で中に入って行き、中に居る生徒にあいさつをする。

「次に、今回、編入生が待機してるから紹介する。それじゃあ、入ってきて頂戴」

相変わらず陽気に喋る担任に呼ばれ、教室の中に入って行った。

部屋中の視線が俺に集まるのを感じ取る。担任の横に辿り着き、生徒達の方を向くと、やはり全ての視線は俺に集まっていた。

「それじゃあ、名前だけじゃ寂しいから、三十秒は保たせてね」
：何だよそれ。特にこれといって何もないぞ…。

「えっと・・・青山 ケインです。まだこの学校の事を良く知らない
ので、皆さんのお世話になる事があると思うので、その時は宜しく
お願いします」

十秒も保たなかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・あらっ、もう終わり？」

「はい」

「趣味は？」

「これと言って特にありません」

「普段 何してるの？」

「家族と出かけたり、散歩したり、話をしたりしてます」

「そっか…。えっと…青山君はその空いてる席に座って」

こうして最初の挨拶が終了した。この後、始業式というものがあり、最後に諸連絡を先生が話し、解散となった。

帰り道、学校からほんの少し離れた所を歩いていると、少し先に
木の上を見上げる少女がいた。近づいて俺も木の上を確信してみると、
少し高い所に穴の空いた円のような形をした白い何かが木に引っ
掛かっている。

「どうしたの？」

放っておくのも何なので、俺が話しかけた。すると、少女はこち
らに振り向いて口を開く。

「あの…」

彼女は再び木の上に視線を移す。

「大切なカチューシャが木に引っ掛かってしまっ…」

やはり、あれか。しかし、どうしたらあんな所に引っ掛かるのだ

ろうか。

「あの白いのだな？」

「え？はい…」

少女は疑問に思いながらも俺の問いに答えた。

「ちょっと待ってな」

俺は四歩ほど加速を付けて木を駆け上がり、一番下の枝を掴んでよじ登る。あとは近くの枝を伝って登るだけ。そうしてカチューシヤを手にとってある程度の高さまで降りると、そこから飛び降りた。「ほら」

呆然として見ていた少女にカチューシヤを渡す。

「あ、ありがとうございますっ」

すると、彼女は頭を下げてお礼を言うと、嬉しそうにカチューシヤを青に近い紫の髪に付け始めた。

歳ははやと同じ位だろうか。カチューシヤの着けられた髪はウェーブ状で腰辺りまで伸びている。目尻が若干低い蒼眼から優しそうな印象を受けた。

「どうしてあんな所に引っ掛かったかは知らないけど、今度は気を付けろよ？」

「はい。本当にありがとうございます」

少女はもう一度頭を下げる。

「ああ。それじゃあ」

そう言って、俺はこの場を立ち去った。

13話 別にフラグは立っちゃいません（後書き）

担任の先生のモデルは、大学のゼミの先生です。

14話 くどい様ですが、手抜きではありません

Another View

編入二日目に行われた国家が実施する学力調査テストの結果が配られてる。

実施科目は国数英理社の五科目。

青山 ケインはと言うと、例の如く国語と数学は完璧。理科は科学と物理でどれだけ稼いでいるか。英語と社会はイマイチ。ただ、入試よりは簡単だったので、それなりには出来た。

「お前、何で百点が二つもあるのに、学内平均点とほとんど変わらないんだよ？」

そう言うのは彼のクラスメイトの男子。

「得意科目と苦手科目がはっきりしてるんだ」

編入して一ヶ月半ちよつと経った。切っ掛けも有って、彼にもこんな風に気軽に話をする友人も出来た。

「まあ良いや。それより、今週は練習に来れるのか？」

その切っ掛けとは、体育の授業でソフトボールをやった時の事だ。彼は打っては四打数四安打本塁打一本三打点。守ってはダイビングキャッチを見せるほどの活躍だった。体育の授業後、クラスメイトに誘われて少年野球チームの練習に参加した所、監督・コーチに気にも入られて、友人からはこうして毎週誘われているのだ。

「ああ。今週は参加させてもらうよ」

学校では友達と喋ったり遊んだりして、帰ったらはやてやヴォルケンリッター達が待っている。そんな何でもない平穏な、だけど最近まで得る事の無かった尊い日々。青山 ケインはそれがずっと続くものだと思っていた。

だが、それは直ぐに崩れるのだった。

「…命の…危険…」

シグナムが思わず呟いた。

「はやてちゃんか？」

シャマルは今聞いた事が信じられないのか信じたくないのか、目の前の女性に聞き返す。

そう…その時はやって来た。

「…ええ」

だが、その女性、石田先生は肯定する。

「どういう事ですかっ？」

青山 ケインは動揺しながら彼女に問う。

「それを今から説明するわ…。はやてちゃんの足は原因不明の神経性麻痺だとお伝えしましたが、この半年で麻痺が少しずつ上に進んでいるんです。この二ヶ月は特に顕著で…。このままでは内臓機能の麻痺に発展する危険性があるんです」

この時、話を聞いていた三人の頭の中は真っ白だった。

病院の廊下で、シグナムは拳を握りしめ、それを壁に叩きつけた。

「なぜっ…なぜ気付かなかった」

誰に言った訳でもない。

「ごめん…ごめんなさい。私…」

だがそれを横で長椅子に腰を掛けて、両手で顔を覆って泣いていたシャマルは自分に向けられた言葉と認識した。彼女も悔いていたのだろう。

「お前にじゃないっ。自分に言っている…」

公開によって不安定になっているのか、口調が若干強くなっている。

「…俺はまた失うのか…」

シャマルの横で座り、腿に肘を着き、両手を組んで額を支える青山 ケインは絞り出すように言葉を発した。

しばらくの間、静寂がこの空間を支配する。

「…ケイン殿。どうか何も聞かないで下さい。ケイン殿は主はやてと先に帰って下さい」

シグナムは項垂れるケインにそう告げ、シャマルに目で合図をし、去った。シャマルもその後を着いて行った。

Episode ケイン

俺は久しぶりにはやての車椅子を押して歩いている。最近、はやての車椅子をいつもシャマルが押していたシャマルは現在居ないからだ。

「なあ、聞いとる？」

「どうした？ はやて」

はやてがいきなり大きな声を出したので、驚いた。

「どうした？ や無いよ。何言ってもうんともすんとも言わへんのやもん」

「…ごめん」

膨れるはやてに素直に謝る。

少し思考に没頭しすぎたようだ。はやてが話しかけてくるのに全く気付かなかった。

考えていた事は二つ。一つははやての病状の事。二つ目は明らかに態度がおかしかった事と、ヴォルケンリッター全員の姿が無い事。俺にはこの二つが関係あるようにしか思えない。しかも、良い予感がしなかった。

「なあ、はやて。先に帰っててくれないか？」

「何や、ケインくんもか？」

寂しそうにするはやて。だが、確かめないとどうも落ち着かない。
「…ごめん」

再び謝って、俺は病院の廊下を駆けだす。ロビーを出ると、離れた所に二人の姿を見つける。俺は気付かれないように後を着けた。

海辺のベンチ付近に四人が集まり、シグナムが全員にはやての病状を語りだした。

だが、それだけで無かった。彼女の口から語られた事は思っても見なかった内容。はやての足は病気ではなく、闇の書の呪いだという事。生まれた時から八神 はやてと共にあったあった闇の書は、彼女と密接に繋がっていた。抑圧された魔力は、人の魔力の源であるリンカーコアという物が未発達であるはやての体を蝕んでいた。健全な肉体どころか、生命活動も阻害していたのだ。それが、第一の覚醒を迎えた事により加速して言った。それは、ごく僅かではあるが、ヴォルケンリッター四人の活動を維持するために彼女の魔力を使用していることも無関係とは言えない。

シグナムが一通り話すと、聞こえるのは波の音のみ。木の陰に隠れている俺からはみんなの表情を確認する事は出来ないが、どんな思いでいるのかは大体想像がつく。

「…助けなきゃ」

不意にヴィータが呟く。

「はやてを助けなきゃっ!!」

こんどは声を上げた。

「シャマルっ、シャマルは治療系が得意なんだろう!? そんな病氣くらい、直せよっ」

そして、シャマルに詰め寄る。

「…ごめんなさい。私の力じゃどうにも…」

が、そんな事が可能なら、こんな重い空気は生まれない。

「何でだ…何でなんだよっ!!!!……うう……うあう……うあううっ

…」

ヴィータは遂に本格的に泣きだした。

「シグナム」

ザフィーラが問い掛ける。

「我らに出来る事は、あまりにも少ない。だが…」

何か決心したヴォルケンリッターの将。

「だが、何なんだ？」

そんな彼女に俺は木の陰から姿を現して問う。

「ケイン殿っ、なぜここに！？」

はやてと一緒に帰っているはずの俺が表れ、シグナムは驚愕する。

「ちよっと引っ掛かってな。後を着けさせてもらった。それで、どうするつもりだ？」

「そうですか…」

俺の問いに表情を元に戻し、言葉を紡いだ。

「我々で魔力を蒐集し、主はやてに真の覚醒をしてもらいます」

「そうすれば、はやては治るのか？」

俺は彼女の目を視線で射ぬき、言う。

「はい。少なくとも、進行は止まります」

視線と問い双方にシグナムは答える。

「…分かった。ただし、俺も連れて行け」

俺は目で威圧するのを止め、そう言った。

だが、言葉にシグナムは険しい顔をする。

「…あなたは魔法を使えないでしょう？」

「ああ。だけど、何か出来る事を自分で探す」

「無理です。正直言って足手まといです」

足手まとい、か。俺も随分と嘗められたものだ。

「そう判断した時は俺を見捨てて構わない」

「しかし…」

「それに、あまり俺を見くびらないでくれ。あの夜話した事を忘れた訳じゃないだろ？腐っても俺は人間兵器なんだ。それに、お前が

はやてとの誓いを破ったように、俺にも譲れないものがある」

シグナムとはやては以前、人に迷惑はかけないという誓いを立てていた。それを、シグナムは彼女自身の譲れないもの、はやての為にその誓いを破った。俺ももう何も出来ずに家族を失いのは嫌だ。幸いにも、今の俺には戦う力がある。

「…分かりました。あなたを連れていきます」

ビルの屋上に移動すると、四人は四角形になり、互いに向き合った。俺は俺の転移をしてもらうシャルマルのそばに立つ。足もとに紋章のような光が浮かび上がり四人は騎士甲冑を身に纏う。

そして、俺達はそれぞれ次元世界へと旅立って行った。

頭に浮かぶのは無邪気に笑うはやての顔。

はやて…お前を死なせなんかしない。

14話 くどい様ですが、手抜きではありません（後書き）

やっと、やっとここまで来た…

さて、ケイン君が口にした「人間兵器」というワード。
これは彼の過去を語る際、大きく関わって来る言葉です。

まあ、彼の過去を明かすのは、まだ先ですが。

15話 蒐集（前書き）

ようやく戦闘シーンです。

ですが、なのフェイはまだ出ません。次の次辺りで出る予定です。

15話 蒐集

Episode ケイン

魔力の蒐集を始めてからしばらく経った。俺達は無人世界の生物や、魔力資質を持った人間からも魔力の源となるリンカーコアという物を回収した。

俺の役目は闇の書の主の振りをして、はやての事が感づかれないようにする事である。実際の魔法を使った戦闘を目の当たりにすると、それ以外の事は出来そうにならなかった。銃があれば何とかなるだろうが、ナイフだけでは渡り合えそうに無い。あれだけでかい口を叩いたのに、結局俺は無力だった。

現在、俺はとある無人世界の山岳地帯にて、空を飛ぶヴィータに抱えられて移動している。

「あそこにあるあれは巣じゃないか？」

俺は十一時半の方角を指して言う。

「あっちだな？」

ヴィータは俺に確認を取ると、進路を変えた。俺はヴォルケンズよりも五感が優れている為、それらを使った索敵は俺が担当している。

山から突き出した先が三つ又の大きな岩。そこに沢山の木で出来た鳥の巣の様な物がある。鳥の巣と言っても、その大きさは野球場一つ程の規模を誇っている。

物陰から巣の中を覗くと、そこには体長二メートル半程の鳥がいた。紫の背に白い腹。くちばしは長く鋭く、口を開くと尖った葉が並んでいる事から、こいつらが肉食であることが容易に想像出来る。下を良く見ると、骨がいくつも木に混ざっていた。

「お前はここで隠れてろ」

そう言うと、ヴィータは勢い良く飛び出す。

「だあああああああつ！！」

彼女の武器、グラーフアイゼンを振りかぶり、勢いを殺さずに振り下ろした。鳥に反撃の機会を与えずにまず一匹を吹っ飛ばすと、再びヴィータはそのまま飛び抜けて上昇する。

それを残りの二匹が追おうと飛び立つが、既にヴィータと鳥の間には十分すぎる程の距離があった。ヴィータはくると方向変換し、鳥たちに向かって行く。ヴィータは角度を付けて、上昇時の失速分を賄って有り余るくらいに加速した。

片や飛び立ったばかり。しかも、自分より高度があるヴィータに向かって行く為、勢いが付かない。二匹目がグラーフアイゼンを浴びて地面に叩き付けられた。

残りの一匹を視界に捉えたヴィータは何もない空間から鉄球を一つ出すと、それをグラーフアイゼンで弾き、鳥に向けて飛ばした。最後の鳥はそれを避ける事が出来ずに落下する。

いくら肉食と言えど、鳥三匹程度を相手にする事は、ヴィータにとって役不足であった。

俺はヴィータの元に行こうと思い歩き出すと、突き出した足だ何かを捉えた。それは金属音を鳴らしながら少し先まで転がって行った。

「おつかれ」

リンカーコアの収集を終えたヴィータに声を掛けた。

「ああ。獲るもん獲ったから、とっとと行くぞ」

「その前に…。これが何だか分かるか？」

俺はさっき拾った薄汚れたバッジを見せる。

「ちよっと貸してみろ」

ヴィータは何か心当たりがあるのか、そう言って右手を出してきた。

「ああ」

彼女の手に乗せ、彼女の言葉を待つ。

「やっぱり…機能は停止してるけど、これはデバイスだな。大方、この世界に来たどっかの馬鹿がこいつらにやられたんだろ」

ヴィータはそう言って、足元の動かなくなった鳥達を親指で指した。

「…そうか。もう壊れてるのか…」

「ん？どうかしたのか？」

落胆した俺の呟きを聞いたヴィータが俺に問う。

「いやさ、無人世界にこんなのがあったから、ひよっとしたら魔法関係の物じゃないかと思ってさ。もし、アイゼンみたいな物だったら、俺も少しは役に立つんじゃないかと思ったんだけど、結局俺は役立たずのままだな」

「…確かにケインが戦えるに越した事はないけどまあ、あたし達だけでも大丈夫だ。絶対にはやてを死なせたりなんかしない。それに、ケインが闇の書の主の振りをしてるから管理局を誤魔化してるんだ。本当なら今頃、奴らははやての搜索に必死になってるさ」

自嘲する俺をヴィータはそう俺を励ましてくれる。

「ありがとう…：さて、いい加減帰ろ…っ！！」

そんなヴィータにお礼を言って、帰ろうと思ったが、沢山の空気を切る音が俺の耳に届いた。

「…どうした？」

俺の異常な仕草に、彼女も緊張する。

「…ヴィータ。あまり嬉しくないお知らせだ」

次の瞬間、岩の下の方から数えるのも億劫になるほど沢山の鳥達

が現れ、巣を囲んだ。

15話 蒐集（後書き）

プロローグから7話まで編修しました。

内容は変わっていないので、このまま読んでいただいても大丈夫です。

16話 主人公のレアスキル(?)はチートですが、チート主人公を書く気はき

Episode ケイン

辺りには見渡す限りの鳥達。我が家への侵入者を排除しようとしているのか、仲間の敵討ちをしようとしているのか、はたまた俺とヴィータという食料を喰おうとしているのか。定かではないが、彼らは俺達に襲いかかって来た。

それをヴィータは空を飛び、少しずつ数を減らしている。時にはアイゼンを魔法か何かで大きくし、数匹まとめて叩き落としたり、俺が危ないときは鉄球を飛ばして援護してくれた。

「はあっっ！」

俺は鳥の突撃を紙一重で交わしながら、翼や急所をナイフで切ったり、時には刺して襲い来る鳥達を迎撃していた。

鳥類というのは空を飛ぶために、自身の体を可能な限り軽くなっている。だが、その代償として、その造りはとても脆いのだ。故に、俺でも何とか戦う事が出来ている。

右から迫り来る鳥を良く見定める。カウンターで切りつけるのは厳しいと判断した俺は正面に飛んだ。直ぐに起き上がると、俺を捉える事が出来ずに通り過ぎて行った鳥にナイフを投げる。すると、それは吸い込まれるように鳥の首に刺さった。

まだ三分の一以上残っている。それに対して、俺の手元に残ったナイフは残り一本しかない。その最後の一本を懐から取り出す。

その時、横から衝撃音が聞こえて来た。そちらを見ると、そこでヴィータが鳥の突撃を避けきれずにガードしている。彼女は可能な限り、俺の方に鳥達の注意が向かないように戦っていた。故に、他の鳥達がこの機会を見逃すはずが無く、彼女に攻撃を仕掛けようと迫りくる。

「くそっ!!！」

俺は迷う事無く、最後に残った一本をヴィータと、彼女に襲いかかる鳥達の間に放った。

鳥達は予想外の事に進路を変更するが、今までヴィータに向いていた彼等の注意が俺に向く。当然、その後は俺に襲い掛かって来た。俺の手元にナイフは残っていない。その上、今まで以上の数が俺に迫ってきている。俺に残された選択肢は死に物狂いに只避けるしかなかった。

ヴィータも鳥を迎撃しつつ、こちらに援護の鉄球を放ってくるが、間に合わない。俺がやられるのも時間の問題か、そう思った時、
「…ぐっ！！！」

その時はやって来た。俺の真ん中を鳥のくちばしが貫いている。俺を貫いた鳥がそれを抜くと、そこから夥しい血が溢れ出て来て、俺はその場に倒れた。

…女の子の声が聞こえる。ヴィータが俺がやられたのに気付いたのだろうか。目が霞んで確認できない。

結局、俺は何も出来ずに死ぬのか。何がクラントの救い手だ…。
大切な人すら救えない。…無力じゃないか…。

親は敵の空襲で、親友とも言える戦友は敵兵に銃で撃たれて死んだ。

…国を救う力なんていらな。多くの人を助ける力なんていらない。ただ、大切な人だけを守る力が…はやてを守る力が。

Another view

薄れゆく意識の中。青山 ケインは強く思った。いくら強く願おうと、それは命と共に直ぐに消えゆく物であるはずだった。だが、

彼は違った。

青山 ケインの胸の部分から強い青の光が放たれた。それは彼を包み、傷を塞いでいく。そして、意識は再び浮上した。

《I confirmed your propose of master. (あなたのマスター権限を確認しました)》

青山 ケインのポケットから音声がかえってくる。彼はそれを取り出すと、それは先ほど拾った壊れたデバイスだった。

《Master, do you start up me? (マスター、私を起動しますか?)》

「そうすればヴィータを：俺の大切な人達を守れるのか？」

手に持った黄銅色のバッチに青山 ケイン問う。

《Please entrust me. (任せて下さい)》

金色のバッチ彼の問いに力強く答えた。

「なら、頼む」

《OK. Please imagine your fighting suit (分かりました。あなたの戦闘服を想像して下さい)》

青山 ケインは言われた通り想像する。彼を救ってくれた父の姿。白のワイシャツの上に茶色のカーディガンを付け、ベージュのコートを羽織った…。

《Starting! (起動!)》

そして、光が消えると、そこには自信が想像した通りの姿の青山 ケインが立っていた。右手に四十センチ程の拳銃を、左手には縦長の盾を持って。

銃を鳥達に向け、一回引き金を引いた…様に見えたが、三匹の鳥が魔力でできた銃弾を受け、落下している。実は、彼は一瞬の内に三回引き金を引いていたのだ。

周りの鳥達が八方から一斉に襲い掛かって来るが、青山 ケインは全てを正確に撃ち落としていく。

そして間もなく、最後の一匹が意識を手放した。

16話 主人公のレアスキル(?)はチートですが、チート主人公を書く気はき

因みに、主人公の盾の形状はガンダムの盾みたいな感じだと思って下さい。

17話 始まり（前書き）

今回は読みにくいかも。

こうしたら読みやすくなるんじゃない、というアドバイスがあれば、お願いします。

17話 始まり

Episode ケイン

今日から十二月に入り、寒さも厳しくなる頃、俺は図書館でこの国の法律書を読んでいた。法律を知っているのと知っていないのとは、全然違う。いざという時、法の知識は自分達を守ってくれるのだ。

窓の外に目を向けると、日が暮れてきたので、今読んでいる本と、ざっと見て良さそうな本を一冊を貸出カウンターへ持っていく行く。一分足らずの簡単な手続きを終え、俺ははやてとの待ち合わせ場所に行向かった。

待ち合わせ場所に行くと、はやては彼女と同じ年位の少女と楽しそうに喋っていた。

「はやて、おまたせ。この子は友達か？」

はやてと話していた、青に近い紫のウェーブヘアを腰辺りまで伸ばした少女を指して、はやてに問う。

「あ、おかえり。そうや。この子は月村 すずかちゃん。さっき友達になったんよ」

はやてはとても機嫌良さげに答えた。

「あの…」

「ん？」

月村 すずかに目を向けたら、彼女が俺に声をかけて来た。

「私達、始業式の日に会ってませんか？」

始業式の日……確か帰り道で…。

「…もしかして、カチューシャの子？」

すると、月村 すずかは笑みを浮かべる。

「やっぱり。あの時はありがとうございました。私、月村　すすかです」

彼女は頭を軽く下げ、自己紹介をした。

「うん。俺は青山　ケイン。これからもはやてと仲良くしてな」

この間、はやては置き去りをくらっていた。

Another View

こうして、青山　ケインと月村　すすかは再開を果たした。この再開が彼の学校生活を一変させる事になるとは、この時は知る由も無かった。

Episode ケイン

シグナムとシャマルと合流し、四人で帰ると、ザフィーラから念話が届いた。

内容は、ヴィータが巨大な魔力を持つ少女と戦闘。撃破した者の三人の援軍が到着。現在劣勢状態。二手に分かれて搜索していた為、現在、移動中との事だ。

はやてには、ヴィータを迎えに行くと言って、俺とシグナムは家を出た。現在、デバイスを起動させ、全速力でヴィータの元に向かっている。

目的地には直ぐ着いた。そこではヴィータが四肢を光の輪っか、バインドで固定されていた。

「シグナム、俺が撃ったら突撃してくれ」

「承知」

俺は一瞬の内に二発放った。標的はヴィータの前に浮かんでいる金髪少女と赤毛の女性だ。二人とも即座に発砲に気付き、後退する事で回避するが、シグナムは金髪少女に愛剣で追撃した。

Another View

シグナムはヴィータと、彼女と対峙する二人の間に割って入るように滞空

「シグナム？」

思ってもみなかった人物の登場にヴィータは驚く。

「うおおおおっ!!」

遅れて到着したザフィーラが赤毛の女性を蹴り飛ばした。

「レヴァンティン、カートリッジロード」

《Explosion》

シグナムの愛剣、レヴァンティンの峰の一部がスライドし、そこから弾薬が飛び出すと、刀身が炎を纏った。

「紫電一閃。はあああああっ!!」

技名を言い、燃え上がる刃で金髪少女に切りかかる。少女はそれを鎌形のデバイスの柄で受け止めようとするが、レヴァンティンはいとも簡単にそれを断ち切った。直ぐに二撃目は放たれ、今度はバリアの様な物で防がれたが、そのまま金髪少女は下に吹き飛ばされ、ビルを突き抜けて行った。

「フェイトーっ!!」

赤毛の女性が叫んで、金髪の女性の元に向かおうとするが、ザフィーラが立ち塞がり、それを許さない。

Episode ケイン

俺はヴィータの元に行くと、シグナムが彼女と向き合い、話しかけている。

「どうした、ヴィータ。油断でもしたか？」

「うるせーよ。これから逆転するところだったんだっ」

ヴィータよ。そうは言う。だがな。

「そんな格好で言っても説得力無いぞ。早くバインドを外したらどうだ？」

俺は分かっているが、そう言う。要はからかっているのだ。

「うう…。ケイン、後で覚えとけよ」

ヴィータは恨めしい目で俺を見る。そんな彼女にシグナムは、

「そうか。それは邪魔したな。済まなかった」
そう言って、ヴィータに向けて手をかざす。すると、バインドに罅が入って粉々に砕け散った。

「だが、あんまり無茶をするな。お前が怪我でもしたら我らが主も心配する」

シグナムがヴィータを窘めると、

「分かっているよ、もう…」

素直じゃないヴィータはそう言って頬を膨らませる。

「それから、落し物だ」

俺はシグナムが突撃した後、見つけたヴィータの帽子を被せてやった。

「シグナム。これ直してやってくれ」

「はい」

シグナムがヴィータの帽子を魔力で補修する。

「…ありがとう」

ヴィータは帽子を押さえて、お礼を言った。

俺とシグナムは何度もぶつかり合うザフィーラと赤毛の女性の方を見る。

「…状況は実質四対三。こちらが有利だ」

「ああ。行くか」

俺の掛け声を合図に三人共飛び出す。

「…あれ」

ヴィータは自らの背中を弄って、何かに気付いたかの様に呟いた。
そして、

「闇の書が無いっ」

とんでもない事を言った。

「何だって！？…くそっ。俺が探してくる」

そう言って、俺は二人と別れた。

「何だ、来てたのか」

俺はスーパールの袋を脇に置いて立っているシャルの背後に降り立ち、声をかける。

「ええ。闇の書が落ちてたんで、拾っておきました。私がヴィータちゃんが倒した子から徴収しますので」

「そうか」

俺は再び線上に目を向けた。

「あの、後からこっちに合流した奴。あいつ厄介だな」

俺はさっきまで居なかった少年を指して言う。

「ええ。攻撃はしてこないものの、このまま粘られてこれ以上増援が来られると、流石に遅くなってはやてちゃんを心配させちゃうわ」

「…援護するか。セブンスター、ロングモード」

《All right》

銃の先に盾を近づけると、二つは光に包まれる。光が消えると、一つの銃身が長いライフルの様な銃が出来上がっていた。それで今、少年と戦ってるヴィータに念話を入れ、狙いを定める。

「っ！！？」

ヴィータが撃破した少女が批難している場所から、大きな魔力反応を確認した。銃口をそちらの方に向けるが、ここからだ狙撃で

きない。

「シャルっ」

「大丈夫です」

シャルはそう言って、今さっき作った輪っかの中に手を突っ込んだ。

「しまった、外しちゃった。でも、あの子の動きは止まりました」
一旦、手を抜いて、再び突っ込む。

「リンカーコア、捕獲。蒐集開始」

《Samlung（蒐集）》

正面に浮いている闇の書に手をかざし、シャルは言葉を紡いだ。すると、次々と白紙だった闇の書のページに文字が刻まれていく。

だが、巨大な砲撃が放たれ、結界は崩壊した。

（…撤退だ。一旦散って、いつもの場所で落ち合おう）

全員に連絡を入れ、全員が撤退したのを確認して、俺は撤退を開始した。

17話 始まり（後書き）

主人公のデバイス名は「セブンスター」になりました。

アニメの方では、シャマルの位置からなのはを目視することが出来ましたが、この小説では狙撃できない位置にいますという事にさせて頂きました。

18話 決意と誓い（前書き）

お待たせしました。

例の如く短いですが、どうぞ。

18話 決意と誓い

Another view

「はやてちゃん、お風呂の支度できましたよ」

柔らかな雰囲気を纏った金髪ショート的女性、シャルマルが床に座ってテレビを見ているはやてに告げる。

「うん、ありがとう」

関西弁だが、雰囲気は京都っぽさを思わせる少女、はやてはシャルマルに労いの言葉をかけた。

「ヴィータちゃんも一緒に入っちゃいなさいね」

シャルマルは着けていたエプロンを外し、はやてと一緒にテレビを見ていたヴィータにも風呂に入るよう言う。

「はい」

赤髪ツインテールの少女、ヴィータが答えると、

「明日は朝から病院です。あまり夜更かしされませんよう」

目と同じく鋭い雰囲気醸し出す桃髪ポニーテールの女性、ソファに座っていたシグナムが、読んでいた新聞を畳んで、はやてに注意を施した。

「はい」

はやてはヴィータと同じ返事をするが、その雰囲気は対照的なものだった。

「では、よいしょっと。シグナムはお風呂どうします？」

シャルマルがはやてを横抱きにし、シグナムに問うと、

「私は今夜はいい。明日の朝にするよ」

シグナムは新聞紙を置いて答えた。

「：そう」

はやてを風呂場に連れて行きながら返事をするシャルマル。

「お風呂好きが珍しいじゃん」

彼女の後ろに着いて歩いて歩いていたヴィータも意外そうに言った。

「たまには、そういう日もあるさ」

シグナムはヴィータに答える。

「ほんなら、お先に」

「はい」

はやての言葉にシグナムが返事をする、お風呂組三人は部屋から出て行った。

そんな彼女たちの会話を、青山 ケインはシグナムの横で本を読みながら聞いていた。

Episode ケイン

「今日の戦闘か？」

三人が部屋から出たのを見計らって、ザフィーラが立ち上がり、シグナムの元に歩み寄って問う。

「敏いな。その通りだ」

シグナムは濁す事無く答えた。

「当たり前だ。尤も、俺とザフィーラ以外、気付かなかったみたいだけどな」

俺は本を閉じ、暫くぶりに口を開く。すると、観念したのか、シグナムはシャツをめくり、腹部を晒した。そこには、斜めに赤黒い線が入っていた。

「お前の鎧を打ち抜いたか…」

ザフィーラが驚いたように言う。驚いたようにと言っても、現在、狼の形態をとっている為、表情からは読み取れない。その上、声のトーンもほとんど変わらないため、慣れてないと中々分からない。

「…澄んだ太刀筋だった。良い師に学んだのだろうな」

シグナムは黒い少女との戦闘を思い返すように語り、上げていたシャツを下した。

「武器の差が無ければ、少々苦戦したかもしれん」

「だが、それでもお前はお前は負けないだろう？」

シグナムの発言に、信頼の籠った言葉をザフィーラが紡ぐ。

「…そうだな」

それに答えるように返した。

「…俺達は負ける訳にいかないんだ」

それは幾度となく固めた決意。俺はそれを口にして、窓の元に行き、外に目を向ける。

すると、二人も俺に続き、こちらに歩いて来て、空を見上げた。

「我らヴォルケンリッター、騎士の誇りに掛けて…」

そして、シグナムは誓いの言葉を。

「それじゃあ、俺は行って来る」

最近の日課。はやてが風呂に入っている間、セブンスターが作り上げた幻想空間に意識を送り、魔法の訓練をしている。

俺は踵を返し再びソファアに座る。

「それでは、主がお風呂から上がりましたら、念話でお知らせします」

「頼むよ」

シグナムと言葉を交わし、俺の意識は幻想空間に旅立った。

18話 決意と誓い（後書き）

次回は学校で…

19話 エンカウト

Episode ケイン

月曜、午前六時四十五分。俺は目覚まし時計に起こされると、制服に着替えてリビングへと向かった。

「シグナム。はい、ホットミルク。温まるよ」

「ありがとうございます」

「ザフィーラにもあるよ。ほら、おいで」

リビングの近くまで行くと、中からはやてとシグナムの声が聞こえた。

俺はリビングの扉を開け、部屋の中に入る。

「おはよう」

俺が言葉を発すると、

「あ、おはよう」

「お早う御座います」

「・・・・・・」

はやて、シグナムが挨拶を返し、狼形態のザフィーラは視線をこちらに向ける事によって返事をした。すると、

「すみません、寝坊しましたーっ」

エプロンを抱えたシャルが慌てて入って来た。

「おはよう、シャル」

そんな彼女にはやてはペースを崩さず対応する。

「おはよう。あーんもーっ、ごめんなさい、はやてちゃん」

はやてとは打って変わってシャルは大慌て。

「ええよ」

はやては全く気にした様子も無く言った。

「・・・おはよう・・・」

最後に、凄く眠そうにしながら、ヴィータが入って来た。

「ほわー、めっちゃ寝むそうやなあ」

はやてはそんなヴィータにビックリしている様子。

「…眠い…」

「もう、顔洗ってらっしゃい」

シヤマルがあまりにだらしないヴィータを窘めると、

「…ミルク飲んでから」

と目を擦りながら答えた。

…今朝もとても平和だ。

Episode 金髪ツインテールの少女

転校初日。同年代の子達の中に入るのすら初めてなのに、ホームルームが終わった途端、私は沢山のクラスメイト達に囲まれて質問攻めにあった。

アリサが場を仕切ってくれたけど、私は終始戸惑っていた。

今はお昼休みになり、お弁当を持って、四人で屋上に向かっていく。

「フェイトちゃん、初めての学校の感想はどう？」

なのはの…ううん、私の友達、すずかが一歩前に出て振り返り、聞いてきた。

「歳の誓い子が、こんなに沢山いるの初めてだから、何だかもうグルグルで…」

「あはは…」

私の言葉に友達のなのはが笑う。

「ま、すぐに慣れるわよ。きっと」

すずかが前を向き直ると、今度はアリサが一歩出て振り返り言った。彼女も私の友達だ。

「うん、だと良いな」

本当にそうなるの良いな。

「…あっ」

さすがが前方に何かを見つけたようだ。

「青山さんっ」

すずかの呼び声に反応してこちらを向いたのは、

「ああ、月村か」

三日前になのはを襲った女の子の仲間の一人だった。彼は一瞬、私と目が合ったが、その視線はすぐにすずかへと向けられた。

Episode ケイン

何事も無いかの様に振舞うが、内心ではかなり焦っている。はやての友達である月村の横には、三日前に俺達がリンカーコアを収集した栗色ツインテールの女の子と、その仲間である金髪ツインテールの少女がいた。

「学校で会うのは初めてですね」

何も知らない月村は笑顔で言う。

「そういえば、そうだな」

俺は月村に内心を悟られないように答えた。

「すずか、この人は？」

更にもう一人の少女。金髪ロングの少女が俺の事を月村に問う。

「あっ、この人は青山さん。前に、始業式の帰りにカチューシャが木に引っ掛かっちゃった事話したでしょ？その時、青山さんが木に登って取ってくれたの」

金髪ロングの少女の問いにすずかは楽しそうに語った。

「彼女たちは月村の友達？」

俺が尋ねると、

「はい」

「アリサ・バニングスです」

「あっ…高町なのはです」

「…フェイト、テスタロッサです…」

月村が答え、金髪ロングの少女、栗色ツインテールの女の子、金髪ツインテールの女の子が名乗った。

「俺は青山。これも何かの縁だ、よろしくな。それじゃあ、俺は戻るわ。じゃあな」

そう言い、俺は立ち去る。

そしてまず、月村にメールを送る。

『件名…ごめん』

本文…俺とはやての関係は内緒にしといてくれ。

理由は聞かないで欲しい

』

と。

次に携帯電話を取り出し、青山さんに電話をかける。

『もしもし、ケイン君かい？』

「はい。青山さん、今日はお願ひしたいことがあって電話しました」

『いったいどうしたんだい？』

電話の向こうで青山さんは笑いながら尋ねる。

「…誰に聞かれても、俺がはやての家に住んでるって事は話さないで欲しいんです」

俺がそう言くと、電話の向こうの青山さんの雰囲気が変わった。

『訳を聞いても良いかな？』

その声は真剣なものだった。

「…済みません、今は言えません。でも、いつか必ず話します。だから…」

俺が必死に頼むと、

『…分かった。君を信じるよ』

青山さんは了承してくれた。

「ありがとうございますっ!!」

『ただし、ちゃんといつか話してよ?』

青山さんはいつもの柔らかな口調で言う。

「はい…必ず」

俺は携帯電話を切って、教室に戻った。

19話 エンカウト（後書き）

キーワードに“残酷な描写あり”があるけど、何か残酷な描写が出てくる予兆が全く無い…。

20話 魔導士三人

Episode フェイト（回想）

昼休みの屋上での事。十二月という時期もあり、少しだけ肌寒かったけど、そんな事はどうでも良かった。

「ねえ、すずか。青山さんってどんな人？」

気になるのはさっきの人。なのはを襲った女の子の仲間。

「まともに話したのはまだ一回だけだけど、凄く優しくて良い人だったよ」

私の質問にすずかはそう答えた。

（回想終了）

『ねえ、なのははあの人達の事、どう思う？』

午後最初の授業。私はなのはに念話で話しかけた。

『あの人達って、闇の書の？』

なのはも念話で答える。

『うん。闇の書の守護騎士達と、青山さんの事』

私はさっきからこの事ばかり考えている。

『えっと、私は急に襲い掛かれて、すぐ倒されちゃったから、よく分かんなかったんだけどフェイトちゃんはあの剣士の人と何か話してたよね？』

『うん。少し不思議な感じだった。上手く言えないけど、悪意みたいなものを全然感じなかったんだ』

感じたのは、真っ直ぐな思いだけ。

『そっか…』

『それに、すずかも言ってた。青山さんは凄く優しくて良い人だ
て…』

あの人からも邪気は感じられなかった。

『闇の書の完成を目指している目的とか教えて貰えればいいんだけ
ど…、話が出来そうな雰囲気じゃ無かったもんね』

『強い意志で自分を固めちゃうと、周りの言葉って中々入ってこな
いから。…私もそうだったしね』

だからこそ、こんなにも気になるのかもしれない

『あ…』

『私は、母さんの為だったけど、傷つけられても、間違ってるかも
って思っても、疑っても、だけど、絶対に間違っていないって信じて
た時は、信じようとしていた時は…誰の言葉も入ってこなかった。

………あ、でも、言葉を掛けるのは、思いを伝えるのは、絶対
無駄じゃないよ。母さんの為だとか、自分の為だとか、あんなに信
じようとしてた私も、なのはの言葉で何度も揺れたから』

だから…

『だから私、青山さんと話をしたい。なのはも付いて来てくれる？』

Episode ケイン

六限の授業が終わった途端、念話が届いた。恐らく、月村と一緒
にいた女の子の一人だろう。話がしたいから、放課後、屋上に来て
欲しい、との事だ。

だが、ここで二人の前に行くのはリスクしかない。彼女達には悪
いが、ホームルームが終わったら早々に多重転送魔法で逃げさせて
もらおう。…そう思ったんだが…。

俺は大きな溜息を吐いた。何故なら、学校に結界が張られたから

だ。

俺は高町、だっけか。彼女の様に結界を破る手段を持ち合わせていない。俺には彼女達に会うという選択肢しか残っていなかった。

目の前の扉を油断なく開けると、そこはいつもの風景とは違っていた。この時間、晴れていれば夕焼けを望めるのだが、今日はそれが無い。

別に雲が架かっている訳ではない。むしろ、空は晴れ渡っていた。ならば何故かという、結界がその内と外を遮断しているからである。

屋上に出て、視線を変えると、そこにはこの学校の制服を着た二人の少女が立っていた。

「念話も通じないから家族が心配する。手短に頼むよ」

俺は十メートル程離れた二人に声を言うと、金髪ツインテールの少女が一步前に出る。

「こんな風呼び出したりして、すみません。時空管理局囑託魔導師、フェイト・テストロッサです」

「民間協力者の高町　なのはです」

フェイトと名乗った少女に、栗毛ツインテールの女の子が続いた。どうやら、今の所あちらに戦闘の意思は無いようだ。

「…青山　ケインだ。で、話とは？と言っても、話せる事は少ないがな」

俺が言うと、フェイトが口を開いた。

「…あなた達がリンカーコアを集めている理由を教えてください」
予想通り、か。

「残念ながら、それに答える事は出来ない」

俺が答えると、

「あなた達の目的によっては、協力できるかもしれません」
フェイトより一步後ろに居た高町が声を上げた。

そんな二人の目は全く濁っていない。とても、馬鹿みたいに…。俺が信じたいと思うほどに。

「協力、ね…なら、フェイト。お前や管理局員達のリンカーコアを蒐集させてくれるのか？」

すると、二人の顔が歪んだ。

「俺達の目的は闇の書が覚醒しない限り、叶う事は無い」

「…それは、闇の書の力が目的という事ですか？」

フェイトは俺に問う。

「そんな物はいらない。俺は失いたくないだけだよ」
少しの間を置いて、俺は再び言葉を紡ぐ。

「…もっと早く…敵になる前にお前達と出会っていたら、信じる事が出来のたかもしれないな」

「…え？」

「俺が帰る前に結界は解いといてくれよ。高町の方はまだ魔法、使えないだろ？そんな状態じゃ、戦いにならないぞ」

俺は踵を返しながらい、屋上を後にした。

21話 鍋と笑顔

Episode ケイン

今晚、月村を家に招待して食卓を囲むために、現在、買い物に来ている。

はやてはシャルに車椅子を押ししてもらい、次々と食材を籠に入れていく。

「そやけど、最近みんなお家に居らんようになってしもうたね」
はやては肉のパックを一つ手に取って言った。

「あ…ええ、まあその…何でしょうね？」

そんな発言に、シャルは一瞬たじろぐが、すぐに笑顔を作ってはぐらかす。

「あ、別に私は全然ええよ。みんなが外でやりたい事とかあるんやったら、それは別に…」

手にした肉を見つめて、はやては話す。

「…はやてちゃん…」

シャルは辛そうに呟く。

「わたしは元々一人やったしな」

そんな事を笑顔で言うはやての頭に俺は手を置いた。

「ケインくん？」

はやてはそんな俺を見上げる。

「また、みんなでのんびり暮らせるさ。誰もお前に寂しい思いをさせたりしない」

「そうです。今は、みんな忙しいですけど、その…すぐにまた…きつと…」

俺の言葉に続いて、シャルははやてに目線を合わせて言った。
はやては暫し呆然とした後、

「そっか。ケインくんとシャルがそう言うなら、そうなんやね」

にこやかに答えた。

「今夜はすずかちゃんも来てくれるし…」

はやては肉を二パック追加した。

「お肉はこんなもんなかな？」

「そうだな」

「はい」

はやての問いに、俺とシャルが答える。二人とも、さっきよりもずっと良い笑顔をしている。

「外は寒いし、今夜はやっぱ、^{あった}暖かお鍋やね？」

「はい」

この笑顔を、俺は守っていく。絶対に。

夜、リビングではお鍋のセッティングが完了している。だが、ここには俺とはやての二人しかない。

「みんな、遅いな…。もうすぐ、すずかちゃんが来てまう…」

はやては不安そうに時計を見て言う。

なぜヴォルケンリッター達が居ないかと言うと、ヴィータとザフィーラが蒐集に出向いた先で管理局に遭遇。結界の中に閉じ込められたのだ。シグナムが応援に向かったのだが、買い物から帰ると、シャルも二人の元へ向かったのだ。

余談だが、買い物から帰って来た時、闇の書は家に置いてあったので、シャルに持って行って貰った。…なあ、俺とシャルの帰りが遅くなったら、どうするつもりだったんだ？

高町から蒐集した時も闇の書を落とすし、どうやらあいつらは大事な所で抜けているようだ。

閑話休題、俺は椅子から立ち上がる。

「ケインくん？」

はやては更に不安気に尋ねて来た。

「ちよっと、あいつらを連れ戻しに行って来る。すぐに帰って来るけど、先に食べててくれて構わない」

俺はそう告げ、家から出る。

「あ、青山さん」

すると、ちょうど月村が呼び鈴を鳴らそうとしている所だった。

「俺は夜遊びの過ぎる奴らを引っ張って来る。気にしないで先に食べてても良いぞ」

月村から見えない位置まで歩くと、俺は転送を開始した。

現地に辿り着くと、まずはシャマルを発見。しかし、彼女は管理局員に背後を取られ、杖を頭に突き付けられている。

俺はすぐさま銃を構えるが、思わぬ介入者が現れ、局員を横から蹴り飛ばした。その者は、ネイビーのショートヘアーで痩せ型。全く見覚えが無い。男性か女性かは不明。何故なら、仮面を被っている、顔を確認する事は適わないからだ。

とりあえずは、介入者を無視し、局員に追撃を放つ。それは、応援に駆け付けた局員のシールド型防御魔法によって阻まれた。そいつは、この前の戦いの時、高町が離脱した後、ヴィータと戦っていた金髪の少年だった。

「ユーノ？」

飛ばされた局員は応援に来た局員の物であろう名前を呟いた。

「大丈夫？クロノ」

その呟きに、俺の射撃を防いだ局員は答える。

俺は介入者の横に降り立ち、この者に尋ねる。

「今現在は見方と考えて良いか？」

「勿論だ。その女、闇の書の力を使って結界を破壊しろ」

シャルに指示を出す介入者の声は男の物に感じられるが、声なんて簡単に変えられるので、何とも言えない。

「でもあれは…」

闇の書を使えば、使った分だけ蒐集したページが白紙に戻ってしまう。故にシャルは躊躇している。

「使用して減ったページはまた増やせば良い。仲間がやられてからでは遅からう」

介入者は更に促した。

「シャル、構わない」

俺は介入者の指示に賛同する。

「ケインくん？」

「こいつの言う通りだ」『それに、みんなが捕まったら、はやてが…』

俺は口で言った後、念話で続けた。

「…っ！、分かりました」『みんな！今から結界破壊の砲撃を撃つわ。上手くかわして、撤退を』

シャルは念話でみんなにこの事を伝える。

「あいつらの相手は引き受ける。シャルは砲撃に集中してくれ」俺はシャルに指示を出し、

「はい」

「黒い方を任せても良いか？」

「…分かった」

先程、蹴り飛ばされた局員を、介入者に任せた。

介入者は、既に体制と整え滞空している黒い局員の元へ向かう。

金髪の少年が黒い局員の元に駆けつけようとするのを、俺は彼の進路に射撃魔法を放つ事によって妨害する。

すぐにシャルが詠唱すると、上空の雲が渦を巻き始めた。

「結界の中にいる奴らを守ってやった方が良いんじゃないか？」

俺は金髪の少年に告げる。

「なにっ？」

「これから結界破壊の砲撃を放つ。中に戻ってなら見逃してやる」
彼は少し考えたのち、結界内に戻って行った。

俺はもう一人の局員の方に目を向けると、地面に激突する寸前で何とか浮き留まった所だ。

「今は動くな！」

介入者は局員に向かって言葉を放つ。

「時を待て。それが正しいと直ぐに分かる」

俺はこの介入者の言葉について思案するが、結局どういう事か分からなかった。

「撃て！破壊の雷っ」

シャマルがそう言い放つと、渦の中心に出来た黒い球状の塊から、紫の雷激が結界に降り注いだ。

『各自撤退っ！！』

俺は指示を出し、離脱した。

全員揃って帰宅すると、はやてと月村は鍋を始めないで待っていた。

「おかえり、ケインくん」

「皆さん、お邪魔してます」

リビングに入った俺達を二人は出迎える。

「：先に食べてなかったのか？」

俺が尋ねると、

「二人で鍋は超寂しいしな」

そうはやては答えた。

「あの：なんて謝ったら良いか：」

シャマルはそう言うが、

「ええよ。ちっとも怒ってへんから。ほな、食べようか。みんな座

って」

はやては笑って、みんなに座るよう促す。

最初は気まずそうにしていたヴォルケンリッター達だが、食べてる内にみんな笑っていた。

食後、シャルが庭に出て行ったのを発見した俺とシグナムは、その後を着いて行った。

「：お前を助けた奴は一体何者だ？」

シグナムがシャルに問う。

「分からないわ。少なくとも、当面の敵では無さそうだけど…」

シャルはそう答えるが、

「だが、完全に見方かどうかは疑わしい」

気になるのは、あの言葉。“時を待て。それが正しいと直ぐに分かる”

「管理局の連中も、これで益々（ますます）本腰を入れて来るだろうな」

シグナムの言う通りだ。今回、多数の管理局員が対応に当たったにも関わらず、俺達を捕える事が出来なかつたのだから。

「あの砲撃で大分^{だいぶん}ページも減っちゃったし…」

シャルは気落ちして言う。

「まあ、今回はあの笑顔を守れたってことで良しとしようじゃないか」

そんな彼女に、俺は中で笑っているはやてを親指で指しながら言った。

「そうですね」

シャルがはやての笑顔を見て、微笑んで答えた。

さて、もう少し彼女を笑顔にしてみますか。

「月村、今日はもう遅いから泊ってくか」
中に入りながら、俺は月村に尋ねた。

22話 空戦適正のある魔術師がスカートのバリアジャケットを使用するのは

Episode ケイン

鍋から数日が過ぎた土曜日。月村が再び家に来る事になった。それが禍し、俺はピンチに陥る。

「ケインくんっ、一体どういう事や？」

関西弁だが、雰囲気は京都っぽさを思わせる少女、いつもおっとりしているはやてが憤怒の表情で俺に詰め寄り、手に持った携帯電話を俺に突き出した。

俺はそれを受け取って耳に当てる。

「…もしもし」

『もしもし、月村です』

電話の相手は月村だった。だが、一体、どうしたと言うのだろうか…。

『お体の方は大丈夫ですか？』

合点した。俺は学校でフェイト、高町と遭遇してから学校に言っていない。それを、月村が心配してはやてに聞いたのだろう。だが…。

「ああ。大丈夫だよ。別に体調を崩してた訳じゃないから。ただ、用事があっただけなんだ。でも、なんで月村がその事を？」

月村はクラスどころか学年が違うのだ。なぜ、彼女が俺が学校を休んでいたのを知っているのだろうか？

『昨日、青山さんの教室に行ったんですけど、ここ暫く休んでいると聞いて…』

「そうか…何か用でもあったの？」

『はい。この前学校で会った時、一緒にいたアリサって子が車を出してくれると言ったので、途中まで一緒にどうかと思ひまして』

アリサは確か、金髪ロングで気の強そうな子だったか。

「そうなんだ。ありがとな」

「いえ、カチューシャのお礼も全然してないですし」

「いや、そんなの気にしないで良いよ。それじゃあ、はやてに返すわ」

俺は苦笑気味に言って、御冠のはやてに携帯を返す。そして、俺は彼女に気づかれない様に、その場から立ち去ろうとしたのだが、

「ケインくんはお話があるから、ここに居てな」
そう上手くは行かなかった。

電話を終えたはやては俺の前にやって来た。

「ケインくん。みんなが外でやりたい事とかあるんやったら、わたしは別に構わない。前、שמאלに行ったけど、ケインくんも同じや。だけど、病気じゃ無いんやから学校には行かな。ケインくんは青山さんのお陰で学校に行けるんやよ？青山さんの行為を無駄にしたらあかん」

彼女は諭すように言う。確かにその通り。青山さんは俺を助けてくれただけでなく、高い費用を出してまで、俺を学校に通わせてくれているのだ。

「そうだな。これじゃあ、青山さんに恩返しする以前の問題だな」
俺がそう答えると、はやては満足そうな顔をした。

週明けの月曜。

ヴォルケンリッターのみんなの反対を押し切って、俺は久しぶりに登校した。クラスのみんなに体体調の事を聞かれたが、月村の時間と同じように対応した。

英語と歴史の授業は…聞かないで欲しい…。全く着いて行けなかった。

仕方が無いので、同じクラスの野球のチームメイトにノートを貸してもらい、休み時間をフルに使って写した。だが、勿論それだけで終わる量じゃない。現在、放課後にまで縛れ込んでいる。

チームメイトの友達は、“終わったら机の中に入れていてな”と言って、もう帰って行った。

「来たか……やっぱり、そう甘くないな」

世界の色が変わっていく。結界に包まれたのだ。

管理局の仕業だろう。俺が休んでいる間も学校を張っていた……いや、フェイトと高町はこの生徒だから、俺が来たら仲間に連絡を入れれば良いのだ。

まあ、そんな事はどうでも良い。今はこの場をどう乗り切るかだ。俺には結界を破る魔法が無いので、相手に解かせる必要がある。

「セブンスター、セットアップ」

デバイスを起動させ、飛行魔法を使い窓から飛び出した、その瞬間だった。俺は仰向けになって盾を上構える。すると、盾が何かを受け止めたような衝撃が走り、その振動を発生させたものによって、辺りが煙に包まれた。

「セブンスター、敵の数は？」

《There is three magical power.

(五つの魔力反応を確認)》

セブンスターは俺の問いに直ぐ答える。

煙が晴れると、五人の姿が確認出来た。俺に向かって杖を構えている、恐らく先程の攻撃を放ったであろう黒髪黒バリアジャケットの少年。他にはフェイトに高町、防御の得意な金髪の少年、フェイトの使い魔であると思われる橙髪の女性が居た。

金髪の少年と赤毛の女性が校舎の上に立っていて、後の三人は二人よりも高い所で滞空している。そして、俺はまだ仰向けのまま。

「……高町にフェイト。絶対に動くなよ」

そう言うと、何人かそれぞれの反応を示す。

「貴様、今の状況を理解出来ないのか？」

黒髪黒バリアジャケットの少年は杖を向けたまま警告する。

「そちらこそ理解してるのか？二人が少しでも動いたらパンツが見えそうぞぞ」

「うっ…」「はうっ…」

俺の言葉にフェイトと高町がはっとし、慌ててスカートを抑えた。
「とりあえず、同じ高さまで上がっても良いか？」

「…仕方ない。許可する」

毒気を抜かれたような表情をしている黒髪黒バリアジャケットの少年の了承を得て、俺は高度を上げる。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。投降するなら君には弁解の機会がある。同意するなら直ちに武装を解除しろ」

クロノと名乗った局員一瞬でモチベーションを元に戻して、投降勧告をしてきた。

「残念だが、それは出来ない」

俺が即答すると、クロノは顔をしかめ、校舎の上に立っている二人は臨戦態勢にはいる。

「青山さんっ、やっぱり話を聞かせて下さいっ」

そう叫んだのは高町だった。

「すずかちゃんと言っていました。青山さんは優しい人だって。何か目的があって闇の書を完成させようとしてるんですよね？わたし達も手伝いますからっ」

「…なのは」

高町が俺に訴えるのを見て、クロノが呟く。

「…言ったら？俺達の目的は闇の書の完成を以ってのみ達成される。守護騎士達もそう言ってたさ」

だから、投降する訳にはいかない。

「交渉決裂だ。さて、どうする？」

五対一。圧倒的にこちらが不利である。だが、やるしかない。

23話 そういえば、戦隊物のヒーロ達って酷いよね。あんな風に寄って集って

短いですが、疲れたし、切りが良いので更新します。

23話　　そういえば、戦隊物のヒーロ達って酷いよね。あんな風に寄って集って

Episode　ケイン

クロノが放つ青色の魔力弾を俺は回避する。

「はあああっ！！」

しかし、避けた先にフェイトが斧型のデバイスで切りかかって来た。俺は盾を前に出し、それを中心にバリアを張って、正面で受けずに左へ受け流す。攻撃を逸らされバランスを崩した彼女に魔力弾を放とうと思ったが、右から桜色の魔力弾が飛来して来たので、俺は上昇する事により回避する。だが、桃色の魔力弾は俺を追うように起動を変えた。しかも、別方向からは青色の魔力弾が迫り来る。

「セブンスターっ、弾幕だっ」

《Spread mode（拡散モード）》

セブンスターの銃身の一部には、横に銃身と同じ太さの二つの筒が付いている個所がある。俺が声を掛けると、その部分がスライドして銃身の一部が横の筒と入れ替わった。

そして、俺が引き金を引くと、前方のほぼ全域に細かい魔力の粒が放たれ、自身に向けて放たれた魔力弾は全て迎撃される。しかし、魔力の粒は十メートル程進んだ所で消えた為、魔力弾を放った者まで届く事は無かった。

次々と繰り出される相手方の攻撃はまだ止まらない。橙髪の女性が右拳を俺に放とうと接近して来たので、迎撃しようと銃口を向けると、反対からカートリッジをロードする音が耳に届いた。俺は赤毛の女性に魔力粒を連射しながら反対側を見ると、フェイトが斧状だったデバイスを鎌型に変え、俺を切ろうと迫っていた。

――まずい…。流石にあれを食らったら只じゃ済まない。

俺は盾を中心に出来る限り全力でバリアを張る。それから盾を伝って左手に衝撃が走るまで時間が掛からなかった。

俺は歯を食いしばってフェイトの攻撃に耐える。その間も魔力粒を放つのを止めない。

暫くすると、バリアを貫けないと悟ったフェイトが一旦、距離をとった。賺さず俺も更に距離を取る。

——相手はこちらに撃つ暇さえ碌に与えてはくれない。流石、魔法戦闘のプロフェッショナルなだけある。対してこちらはつい最近、魔法を使いだしたばかり。普通の戦闘はともかく、魔法となると経験不足である。だが、…だからといって。負けるつもりは毛頭無いっ！！

俺は盾を中心に円錐状のバリアを張る。その瞬間、

「なに！！？」

俺の四肢が固定された。

——しまったっ、バインドか！！

「これ以上の抵抗は無駄だ」

クロノがデバイスを俺に向け、ゆっくりとこちらに来る。

「…チェックメイトだ」

彼がそう言った瞬間、上の方から爆音が響いた。

24話 反撃（前書き）

遅くなりました。

相変わらず短いですが、どうぞ。

24話 反撃

Episode ヴィータ

あたしは現在、展開されている結界の外にいる。

蒐集から帰ってきたら、学校の方から結界の気配を感じ取ったので駆けつけてみたら、この通り。多分、ケインが管理局の奴等とやりあっているのだろう。

全く、だからあたしは反対したんだ。

あたしは内心、悪態を吐く。おそらくは一人であいつら全員を相手にしている。

「アイゼンツ」

カートリッジを二発ロードして、結界に突っ込んだ。

Another view

上空から爆音が響く。全員が音源の方に視線を向けると、赤服に赤い帽子、ツインテールの髪も赤と全身赤尽くしの少女。ヴォルケンリッター鉄槌の騎士、ヴィータが自身の身の丈ほどの大きさを誇る角柱となったグラーフアイゼンを振りかぶり、クロノに向かってきた。

彼は咄嗟にシールドを張るが、振り下ろされた槌に容易く吹き飛ばされ、校舎に激突する。

その後、間も無く、別方向からも爆音が発生した。そこから現れたのは、紫と白を基調とした騎士甲冑を纏った桃髪ポニーテールの女性。ヴォルケンリッター烈火の将シグナムである。

二人はケインを守る様に、なのは達の前に立ち塞がった。

「ヴィータ…シグナム…」

ケインが二人の登場に驚いて呟くと、

「ようケイン。随分なザマだな」

ヴィータは振り向き、いつかのお返しだと言わんばかりに笑みを浮かべて言う。

「ぐっ…」

ケインは自分に突き付けられていた物が無くなった為、バインドを解析・解除するが、その表情は苦虫を噛み潰したような表情だった。

「ケイン殿、テストロッサは私にお任せ下さい」

シグナムはそう言うと、フェイトに対面するように前に出て、八相の構えをとる。それに対して、フェイトは魔力刃の鎌のデバイスを脇構えに構え応じる。

「あたしは高町……何とかの相手をする」

ヴィータも言葉を発し、鉄球を五発出現させた。高町はと言うと、“なのはだよ！！なっ・のっ・はっ”と手をバタつかせながら不平を言う。緊張も何もあったもんじゃない。

「頼む。相手が二人ならば…」

ケインは言葉を紡ぎながら、再び盾を中心に円錐状のバリアを張る。

「…何とかなる」

言い終わると同時に、彼は発生させたバリアを高速で回転させた。合図は無かったが、三人同時に動き出す。

ケインは左手に持つ盾を正面に出し、高速移動魔法を使って橙髪の女性に向かって突っ込む。相手は右ストレートを放って対応を図った。が、彼女が放ったその拳はバリアの回転により上へと逸らされる。それによりがら空きになった彼女の右半身を錐の先端が捉えた。それだけでは終わらない。今度は彼女の体ごと回転に巻き込まれ、左下に吹き飛ばされる。ケインは締め込みに地面に衝突するであろう橙髪の女性に魔力弾を五発放ち、それは吸い込まれるように彼女に当たった。

フェイトが“アルフ”と自らの使い魔である橙髪の女性に向かって叫ぶ。直ぐにでも駆け付けたいのだろうが、対峙するシグナムがそれを許さない。

「…これで一対一だ」

彼は後ろにいるクロノに言葉を投げ掛けた。

24話 反撃（後書き）

バリアの円錐は頂点角 70° 。→ 80° 。と考えて下さい。

25話 電光石火

Episode クロノ

射撃魔法を数発程放つが、相手のバリアに阻まれる。形状が円錐のうえ、回転している為、極限までに衝撃を逃がされている。故に、一発も有効打にならなかった。しかも、相手はバリアの陰に身を隠し、突撃してくる。まるで、太いランスが高速で飛んで来るかの様だ。僕は横に回避を試みたが、しっかりとホーミングしてきた。相手が使っているのは飛行魔法とバリア魔法、高速移動なので、当然、ある程度曲がる事が出来るのだ。

「くっ…」

バリアの先端は回避出来たが、側面部分は避けられなかった。

回転に巻き込まれ、吹っ飛ばされる。必死に体制を立て直そうとするが、既に魔法弾が僕に向かって放たれていた。防御は…：間に合わない…。

撃ち抜かれるのを覚悟すると、僕と魔法弾の間に割り込む影があった。

「…ユーノ？」

Another View

(ユーノ。君は結界の維持に専念…)

(そんな事言ってもらえる状況じゃ無いだろ！あの人、かなり強いよ。アルフが簡単にやられちゃって、クロノだってさっき…)

クロノの念話を校舎の上で待機していた少年、ユーノが同じく念話で遮った。

ユーノの言う通り、彼が割り込まなければ、クロノは戦闘不能に

ならなかったとしても、かなりのダメージを受けていただろう。

(…そうだった。すまない)

二人が地上でそんなやり取りをしている間に、青山 ケインは高度を上げ、二人に向かって降下しようとしていた。

「セブンスター、設置だっ」

《Establish mode (設置モード)》

セブンスターの銃身の一部がスライドすると、ケインは一気に高度を下げた。

クロノとユーノが左右に分かれて回避を取ったのをバリア越しに確認したケインは、ユーノの方に進路を変えた。彼の防御力が厄介だと判断したからである。

ユーノはシールドを張って迎え撃つが、ケインの高速移動魔法に加え、急降下による加速が上乗せされた勢いに勝てず、彼はシールドごと吹っ飛んだ。

その隙に、クロノは魔法弾を発生させていた。

このケインの戦術はシールドを円錐状にして回転させる事によって防御力を上げるだけでなく、そのバリアをランスの様に使う事によって攻防一体を実現したものである。だが、すれ違い際なら攻撃が当たるのではないか。クロノはそう考えていた。だが、そんな事は術者も重々承知しているだろう。恐らく、自分には魔法弾が飛んで来るだろう。それでも、刺し違えてでも奴は落とす。これがクロノの計画である。

「イグニッション」

だが、ケインがそう言うと、彼の後方からクロノに向かって二発の魔法弾が飛んで来た。

思わぬ方向からの攻撃に、クロノは防御できずに食らってしまった。

ケインはユーノに進路を変えて直ぐ、後方に向けて引き金を二回引いたのだ。それが空中で停止し、彼の合図と共にクロノへと飛んだ。

設置モード。これは魔法弾を発射すると、二メートル程先で一旦停滞し、使用者の任意のタイミング、任意の方向に放つ事が出来る青山 ケインのデバイス、セブンスターのバリエーションである。

ケインは輪を描くように上昇、降下をして、先程吹っ飛ばされて地面に横たわるユーノにバリアで突く。

体制を立て直す時間が全く与えられなかったユーノは再びシールドで防ごうと試みたが、数秒後、ケインのバリアはユーノのシールドを貫き、彼の鳩尾を捉えた。

円錐状のバリアと地面とのサンドイッチ。ユーノは堪らずに意識を手放す。

すると、決壊が消えていく。結界を張っていた彼が気絶した事により、決壊を維持する事が出来なくなったのだ。

（みんなっ、撤退だ。捕捉されるなよ！）

ケインが念話で指示を出すと同時に、クロノはなのはの時と同じように蒐集された。近くでシャマルが待機していたのだろう。勿論、ユーノからも蒐集した。

これ以上、ここに留まる理由が無くなったケイン達は、彼の指示通りに撤退した。勿論、誰一人として捕捉されることは無かった。

25話 電光石火（後書き）

次もオリジナルストーリーの予定。

デバイス設定

名前…セブンスター（データが消えていたので、青山 ケインが命名）

待機状態…バッジ（黄銅色のひし形。角に小さな球が付いている）

名前の由来は、青山 ケインが吸っている煙草。セブンスターで戦闘を行う際、二つの形態を状況によって分けて使用する。

一つがノーマルモード。右手に四十センチ程の拳銃—（銀色）を、左手には縦長の盾—（形状はガンダムの盾。ただし、黄銅色で、真ん中には待機状態のバッジが描かれている）。

拳銃は銃身の一部がスライドして、三本のカートリッジが入れ替わる仕組みになっている（カートリッジシステムとは無関係）。これが入れ替わる事によって通常発射、拡散発射、設置発射—（※1）が変わる。

盾はそのままで攻撃を防ぐ事も可能だが、盾を中心にバリアタイプの防御魔法を張る事により、魔法の強度を上げる事が出来る。

もう一つはロングモード。拳銃と盾が一つになった、スコープの付いたライフルの様な銃。長距離・精密射撃が可能となっている。ただし、こちらは通常発射しか出来ない。

※1

通常発射…直射型・誘導制御型の魔法弾を普通に放つ形態。

拡散発射…銃口で魔法弾を破碎し、から円錐角160°。正面全域を攻撃する。ただし、破碎して細かくなった分、魔力発散が早く、10m程度で消えてしまう。有効射程は7m以内。

設置発射…直射型・誘導制御型の魔法弾を発射すると、2m程先で一旦停滞する。後は、使用者の好きな時に発射出来る。

26話 最短記録。509文字（前書き）

ごめんなさい。小説熱がまっきり冷え込んでいて…。

いつもの事なので、その内また熱が戻るまで、このペースで行く
と思います。

26話 最短記録。509文字

Episode ケイン

管理局は少数精鋭で挑んでくるようだ。昨日の戦いに五人しか出て来なかった事からも分かる。その内、二人から蒐集したので、数日間は向こうから戦闘を仕掛けてくる事は無いだろう。故に、今日は気を抜いて授業を受けているのだった。

四時間目の学級活動。黒板には“他学年交流”と書かれている。聖祥学園では、上下級生の交流という事で、午後の授業二時間を使い、違う学年のクラスとを使ってレクリエーションをするらしい。現在、その事について、先生がいつもの如く陽気に話している。「今回は三年一組と一緒にやる事になりました。五時間目の種目は向こうが決めたので、うちはこの時間中に六時間目にやる事を決めようと思います。ちなみに、五時間目はドッジボールだったかな。だからあんまし激しくないものにした方が良さと思う。それじゃあ、何かしたい事がある人は手を上げて」

「バスケ！」

「けいどろ！」

「トムとジェリー！」

皆思い思いのゲームを言っていく。ってか、お前ら先生の話を聞いてたのか？どれも激しく動くものばかりじゃないか。

・・・にしても、三年一組というと、月村達のクラスだよな…。
ってことは、あの二人も…。

結局、六時間目はけいどろになった。

27話 決戦前

Episode ケイン

他学年交流会交流会当日。俺達のクラスと三年一組は校庭に整列して、先生の話聞いていた。

まず、始めにドッジボールを行う。公式ルールとは違うので、ルールのおさらいをしよう。

- ・十六人前後の男女混合チーム（全四チーム）。
- ・一試合五分。
- ・ジャンプボールは三年一組が行う。
- ・ノーバウンドで複数人当てた場合、最初の二人がアウトになるが、例えば三人目以降の人でも、ボールが地面に着く前に誰かが補給したら、全員セーフとなる。
- ・顔面、頭部に当たった場合、その者はセーフとなる。
- ・内野以外は外野と見なす。
- ・男子は女子相手に紳士的に（暗黙の了解）

先生の話と準備体操が終わり、チームに分かれる事となった。チームの半数は三年一組である。

「あ、あのっ…」

その中に見知った二人が居るようで、俺に声を掛けて来た。

「よう。高町にフェイト。って事は、同じチームか」

今、戦闘になる事は無いと思い、普通に接すると、二人は頷いた。だが、どちらも緊張している。まあ、仕方ない。俺と二人は敵同士だから。

俺は二人の頭に手を置く。

「そんなに堅くならなくても、今ここで戦おうなんて思っちゃいな

いよ。ここは戦場じゃない」

俺は手に乗せたまま、苦笑して言う、二人はきよとした。

「おいおい、早速口説いてんのかよ？」

「…女性の頭に手を載せて口説く奴が居るなら、見てみたいもんだよ」

やれやれといった感じで俺に声を掛けて来たのは、クラスメイトであり、野球のチームメイトの小板橋こいたはし慶介けいすけ。メタ発言をすると、14話で名前が出て来なかったやつである。閑話休題。

「お前はチームの所に行かなくて良いのか？」

「大丈夫。すぐそこだし、他もこっちに来てるから」

目を向けると、こっちに向かって何人かやって来ている。その中に月村とアリサが居た。

「こんにちは、青山さん」

二人は礼儀正しく挨拶をしてきた。

「おう。てっきり四人は同じチームかと思ったんだが、分かれたんだな」

そう俺が疑問に思った事を口にする、二人は苦笑して、月宮が答えた。

「最初はそうしようと思ったんですけど、私とフェイトちゃんが同じチームだと面白くないと、みんなから言われてしまって…」

「へえ。じゃあ、フェイトには期待して良い訳か」

俺は改めてフェイトに視線を向ける。

「…え？あ、はい…」

未だにきよとしていたフェイトは焦るように答えた。

俺達のやり取りを聞いていた、暫し蚊帳の外だった小板橋が尋ねて来た。

「なんだ、お前ら知り合いか？」

「ああ。月村とは図書館で縁があってな。他は月村經由だ」

「ふーん。で、お前はいつまでそうしてんだ？」

小板橋が指差した先は、未だにフェイトと高町の頭にのった俺の

手だった。

「ああ、悪い」

俺はそう言い、二人の頭をぽんぽんと軽く叩いて、手を下す。二人は相変わらず、きょとんとしていた。

小坂橋はやれやれといった表情で苦笑した。

28話 親友（前書き）

済みません、お久しぶりすぎましたっ!!

因みに、まだ内定をもらっておりませんorz

これからも、更新が滞る事があるとは思いますが、必ず完結はさせるので、もし宜しければ、今後もお付き合い下さい。

28話 親友

Episode ケイン

縦横無尽に飛び交う物を目で追い、こちらに向かって来たら、腕で包み込むようにして、それを捕る。

ピーッ！！

甲高いホイッスルの音が当たりに響いたので、俺は直径二十五センチ程のボールを手にしたまま前に出た。下にラインが引かれた所まで行き、ホイッスルを首から下げた三年の先生にボールを渡した。俺のチームは現在、二勝零敗。フェイトの活躍により、快進撃を遂げている。ゲームが始まる前に月村の話を聞いて期待していたが、予想以上の活躍を見せた。彼女は同級生だけでなく、五年生をも次々とアウトにしていたのだ。

「次が最後だ。ここまで来たからには、絶対に優勝するぞっ！！」

「「「「「おーっ！！！！」」」」」

クラスメイトの男子、あきつき秋月が宣言すると、周りの皆もそれに同調した。

「フェイトちゃんだったか。次もこの調子で頼んだよ」

「…はい」

宣言した後、彼はフェイトに声を掛け、それに彼女が控えめに答えた。

「そして最後に青山。今度は一切遠慮はいらないからな」

秋月は続いて、俺にそう言った。何故なら、俺は今までの二試合、捕ったボールを全て外野に回していた。

「ああ、分かってる。今度はあいつが居るからな」

そう言って、俺は小板橋に視線を向ける。

「よし、じゃあ行くか」

皆、次のコートに移動を開始する中、俺は二人の少女の元に向か

った。

「なあ、フェイト。ちょっと良いか？」

Another View

ホイッスルの音が試合開始を告げると、先生が上に投げたボールに向かって、フェイト・テストロッサと月村すずかの二人が飛びあがる。

ジャンプボールを制したのは月村だった。フェイトは急いで後退する。ボールをとった三年生の男子は同級生の男子に向かって投げた。投球を受けた方はそれを捕る事が出来ず、外野に移動した。

味方に当たり、前に転がっていくボールを青山ケインが追いかけ、拾い上げた途端、アンダースローでボールを放った。集団に向けて放たれたそれは二人を仕留める事に成功した。

二人を仕留めたボールを拾ったのはアリサ・バニングス。彼女が狙うは高町なのは。フェイトが放つほどの威力は無いが、なかなか鋭いボールがなのはに向かっていく。なのははお世辞にも運動神経が良いとは言えない。そんな彼女を先に仕留めようという魂胆だろう。だが、それを阻む人物が居た。彼は前の二試合でなのはの運動神経を目にしている。ケインはアリサとなのはの間に割って入り、捕球すると、背後のなのはにふわりとパスした。

「ほえっ！？ えっと：フェイトちゃん、パス！」

フェイトはボールを受け取ると、月村目掛けて投げる。手加減なしで放たれたボールを月村は難なく捕球した。

「青山さん、ありがとうございます」

まだ、ほんの少しきこえないものの、なのはは微笑んでお礼を言う。

「ああ。まだまだ来るから気を付けろ」

ケインはボールから目を離さずに答えた。

Episode ケイン

幾度となく攻防が繰り返され、内野に残っているのは、相手が小板橋と月村、こちらが俺。現在、二対一である。フェイトは月村に敗れ、現在、外野に居る。

小板橋がボールを持ち、俺に視線を向ける。

「これでラストっ！」

空気を切る音をさせ、一直線に飛んで来る。今日見た中で一番鋭いが、俺はしっかりと腕の中に収める。

「やるじゃねえか」

「何度お前の球を捕って来たと思ってるんだ？」

楽しそうに言う小板橋に俺は当たり前だとばかりに応える。あいづは野球チームのエース。そして、俺はキャッチャー。小板橋と俺はバッテリーを組んでいるのだ。

俺は小板橋に全力で投げ返す。球威はあいつに引けを取らない。

だが、あいつもしっかりとキャッチした。

暫く、二人で全力の攻防を繰り返す。小板橋は凄く楽しそうに笑っている。多分、俺も同じ顔をしているのだろう。最高の気分だ。楽しくて楽しくて気分が高潮する。こんな気分になさてくれるのはお前だけだよ。

だけど、もう残り時間が少ない。このままではこちらが負けてしまう。そろそろ決着をつけなくてはならない。

俺は全力で投げる振りをして、正面の外野にいるフェイトへ山なりにパスをする。小板橋と月村はフェイトから距離を取った。

「フェイトっ！！」

俺が声を掛けると、試合前に打ち合わせた通り、フェイトは俺に向けて全力投球した。それをキャッチした俺は、十分に距離が詰まっている小板橋に向けて、全力でボールを放つ。俺から距離を取る

時間が与えられなかった小板橋はボールを取る事も避ける事も叶わなかった。

ボールが地面に着いた所で、試合終了のホイッスルが鳴った。

「畜生っ、やられたっ」

そう言う小板橋だが、凄く良い顔をしている。

試合はお互いに一人ずつ残った為、引き分けに終わった。

「まあ、フェイトが居なかったらどうなったか分からないけどな」
そう言って、横にいるフェイトの頭に手を載せる。すると、フェイトはくすぐったそうに俯いた。

「いえ、私は大した事してないです」

そう言って、遠慮気味に答える。

「そんな事ないよ」

「うん。最後、凄く格好良かったよ」

「でも、次は負けないからね」

上から月村、高町、アリサがそれぞれ言った。

すると、遠くでうちの先生がメガホンを使い、指示を出す。

「それじゃあ、その場でチームごとに学年別で二列に並んで！」

全てのチームが並び終わると、次の指示が出た。

「端から1・2・3・4の番号を言ってって。その番号のチームでもう一回やるよ」

番号を言い終え、新たなチームで集まると、そこには小板橋、フェイト、月村の姿があった。

この後、俺達のチームが無双したのは言うまでも無い。

29話 Girls side

Episode なのは

青山さんに会うのに少し緊張した。本当は優しい人だというのは、すずかちゃんの態度を見ればよく分かる。でも、彼は犯罪者で、クロノ君とユーノ君が二人掛かりでも勝てなかった相手なのだ。

今日のドッジボールで、青山さんとは同じチームだったんだけど、合流して早々毒気を抜かれた。頭に置かれた手は優しく、とても温かかったのだ。

最後の試合も、あらかじめフェイトちゃんとコンビネーションを決めた。

まるで、お互いに敵対しているのが嘘か様だった。

…そんなあなたが罪を犯す理由は何ですか？

Episode フェイト

クロノから気を付けるよう言われていた。まだ収集されていない私の巨大な魔力は、青山さん達にとって喉から手が出る程欲しいはずだと。

でも、実際に青山さんに会うと、笑って私達の頭に手を置いた。彼はとても楽しそうにただ学校生活を送っていた。そこからは、以前、私達と戦った時の雰囲気は感じない。

だけど、なのはを、クロノとユーノ、他にも何人もの魔導士を傷付けたのは、他でも無い青山さんなのだ。

すずかは彼を優しい人と称していた。実際、私も悪い人だとは思

わない。それは戦闘を交わしたシグナムも同じだ。

何か訳があるのだろう。力になれるならなりたい。でも、青山さんはそれを教えてくれなかった。

でも、私は諦めない。なのはの言葉に私は何度も揺れたから…。

今度は私がお話をする。何度でも、何度でも。本当に強い私の親友みたいに。

30話 原作とほぼ変わらないのは、作（ry

Another view

文化レベル零、人類が存在しない砂漠の世界。地球時間で日曜日、そんな世界に、長い胴体に甲を携え、頭を砂から出した蛇の様な現地の生物と対峙する者がいた。紫と白を基調とした騎士甲冑を纏った桃髪ポニーテールの女性、ヴォルケンリッター烈火の将シグナムである。

そこから離れた所には、ネイビー色で丈無しの衣を身に纏う小麦色の肌をした狼耳狼尾の銀髪男、ザフィーラが宙に佇んでいた。彼は動く様子を見せない。

シグナムの一瞬の隙をついて、彼女の背後に砂から尾を出し、そこに付いた触角でシグナムを拘束。彼女を締め上げた。

それでも、ザフィーラは動かなかった。自らの将はこの程度はどうという事無いという信頼か、又は彼には別の役割が存在するのか。蛇の様な生物が締め上げたシグナムに襲いかかろうとした瞬間、

《Thunder blade》

機械音声と共に魔法で出来た雷の剣が、空から蛇の様な生物に降り注いだ。

シグナムが空を見上げると、そこには黒を基調とした無駄の無いフォルムのバリアジャケットを身に纏った金髪紅眼の少女、フェイト・テストロッサが金色の魔法陣の上に立っていた。彼女は手首に魔法陣を携えた左手を掲げ、振り下ろしながら言葉を紡ぐ。

「ブレイク！」

言葉を合図に、蛇の様な生物に刺さった魔力性の雷剣が次々と爆発し、それを駆逐した。

その頃、ザフィーラの元にも人影が現れた。

「御主人さまが気になるかい？」

ザファイラにその言葉を投げかけたのは、橙髪が後ろから二股に足まで伸ばした碧眼の女性、フェイトの使い魔のアルフである。彼女にも狼耳狼尾が付いているが、ザファイラが灰色に対し、彼女の物は毛と同じ橙色をしている。

「：お前か」

ザファイラはただ、そうとだけ返した。

管理局側の拠点で警報音が鳴り響き、モニターには“Emergency”の文字が浮かび上がった。

「もう一ヶ所!？」

モニターの前に座っていた女性がそう言い、モニターを見ると、それには空を疾走する黒のフリフリが付いた赤のゴスロリ服と帽子に身を包んだ少女―（?）、ヴィータと白のワイシャツの上に茶色のカーディガンを付け、ベージュのコートを羽織った様なバリアジャケットの青山 ケインが写しだされている。

「本命はこっち……なのはちゃんっ!」

「はい」

「二対一になっちゃうけど、大丈夫?」

茶髪ツインテールの少女、高町 なのはに出撃令が下された。

前回の戦闘でクロノとユーノが闇の書に魔力を蒐集されている為、管理局側が保有する、青山 ケイン率いるヴォルケンリッターに対抗し得る戦力は、フェイトとその使い魔アルフ、そしてここに居るなのはだけである。そもそも、二人は今、地球に居ない。

「今度こそ、お話を聞かせて貰ってきます」

迷い無くそう言って、彼女は出撃した。

シグナム、フェイト、ザファイラ、アルフが戦っている所とは別の世界。あちらとは対照的に、自然豊かな場所である。ここにケインとヴィータ、そして二人の前に立ちはだかる影があった。白と青のバリアジャケットを纏ったのはだ。

Episode ケイン

俺とヴィータが空を移動中、目の前になのはが滞空してたので、俺達は一旦止まった。思ったよりも早くシグナム達の元にフェイト達が現れたから出来るだけ早く済ませたかったが、そうもいかないらしい。

そんな中、ヴィータと高町は前回の戦闘での“高町 何とか”の件をまたやっている。そんな二人を見て、少し力が抜けた。

高町の顔が、真剣なものに戻る。

「ヴィータちゃん、青山さん、やっぱりお話聞かせてもらおう訳にはいきませんか？もしかしたらですけど、手伝える事とか、あるかもしれないません」

そう言う高町の表情は優しい物に変わった。その表情と、真っ直ぐな言葉に俺は一瞬、心を引きつけられた。

ヴィータも同様の様で、表情が変わった。だが、彼女も直ぐに表情を戻し、

「うるせえ！管理局の人間の言う事なんざ信用できるかあっ！！」
そう突っぱねる。そんなヴィータに高町は

「私、管理局の人じゃ無いもの」

そう言い、両手を広げて、

「民間協力者」

と続けた。

：向こうはあまり好戦的では無い様だが、早くシグナム達の援護に向かいたい。

（ヴィータ、お前はシグナム達に合流しろ。俺が少し時間を稼ぐ）
念話でヴィータにそう伝えたと、彼女は頷いて後ろに下がって行った。

高町がそれを追おうとするので、銃口を彼女に向け、それを制した。

「高町が管理局側に居なければ、その提案は是非とも飲みたい所だな。別に力が欲しい訳じゃないが、闇の書を完成させなければなら
ない以上、俺等とお前達は相容れる事は無い」

後方でヴィータが次元転送を開始した。

「なら…」

高町が杖型のデバイスをこちらに向けて構えた。

「私が勝ったら、話を聞かせて下さい」

彼女の周りに魔力弾、スフィアが六つ浮かぶ。瞬間、高町の体が
バインドで拘束された。

「え？」

「誰だ!？」

高町は困惑の声を上げ、俺はバインドを使った者を探した。

「…行け」

その声は後ろから聞こえた。振り返ると、そこには以前も表れた
仮面の者がいた。

「…助かる」

俺も転送魔法を起動すると、シャマルから念話が入った。

（ケイン君、シグナム達の方は終わりました）
（分かった。これから戻る）

俺は魔法を発動させ、この世界から消えた。

五万H*i*t記念 すとらいかあず小ネタ（前書き）

細々と五万H*i*t達成です。

こんな小説をクリックして頂いた皆さん、有難う御座います。これからも、宜しくお願いします。

追伸、踏み逃げ大歓迎（笑）

そのアクセス数に碧河は勇気付けられます（爆）

五万Hit記念 すとらいかあず小ネタ

なのは 「さあ、始まるザマスよ」

フェイト 「行くでガンス」

はやて 「フンガー」

アリサ 「まともに始めなさいよ!」

????????????????

「…少し、頭冷やそうか・・・クロスファイヤー」

なのはは底冷えするような声で言い、足元と手の周りに魔法陣を展開し、ティアナに人差し指を向ける。

「はああああああああ…っ! フォントムブレ…」

ティアナも射撃魔法を放とうとするが、

「シュート」

それが発動前に、なのはの方が先に射撃魔法を完成させ、ティアナに向けて放った。攻撃態勢に入っていたティアナにはそれを避ける事も防ぐ事も叶わず、射撃魔法は彼女にクリーンヒットし、爆煙を発生させた。

スバルがティアナの名を叫び、駆け寄ろうとするが、それはなのはの掛けたバインドにより阻まれた。

「…じっとして良く見てなさい」

なのははスバルに視線すら向けず、只言葉のみを与える。そんななのはは魔法陣を出したまま、ティアナが居るはずの場所を見つめている。

爆煙が晴れてくると、そこには満身創痍のティアナが姿が確認できた。瞬間、なのはが第二波のチャージを始めた。

「なのはさんっ!!」

スバルの必死の叫びものには通じず、再びティアナに射撃魔法が放たれた。

模擬戦の見学組に混ざっていたケインはというと。

「…ミッドチルダの修正は強烈だな…」

人知れずそう呟き、冷や汗をかいていた。

そんなケインの横に居たのはフェイトだったが、なのはの全力全壊をその身に受けた事のある彼女は、ケインと対照的に非常に冷静だったようだ。

五万Hit記念 すとらいかあず小ネタ（後書き）

非バトル系を書く方が楽しいと感じているのは秘密（笑）

31話 家主のいない家族会議

Episode ケイン

明け方、はやてがまだ部屋で寝ている中、帰還した俺達はリビングに揃っていた。

話の内容は先程、俺達を助けた仮面の奴の事である。

「…助けて貰ったって事で良いのよね？」

そう確信なく言ったのはシャルである。

「少なくとも、奴が闇の書の完成を望んでいるのは確かだ」

その点については、シグナムも同意見の様だ。

「だが、そうなると闇の書の完成がどう奴らのメリットになるかだ」
恐らくは皆が腑に落ちないであろう事を俺が口にする。

「完成した闇の書を利用しようとしているのかもしれない」

一つの可能性をザフィーラが上げた。

「ありえねえ。だって、完成した闇の書を奪ったって、マスター以外には使えないじゃん」

が、それをヴィータが切り捨てる。そう、例え闇の書が完成したとしても、奴がそれを使う事は出来ない。となると…。

「…目標ははやてか…」

「いえ、完成した時点で主は絶対的な力を得る。脅迫や洗脳に効果があるはずありません」

俺の予想をシグナムが否定した。そうなると、完成自体が奴の目的となる。

シャル曰く、家の周りのセキュリティは万全なので、万が一にもはやてに危害が及ぶ事は無いだろうとの事。だが、ザフィーラの提案で、念の為、シャルは出来る限りはやてから離れないようにする事となった。

「…ねえ、闇の書を完成させてさ……はやてが本当のマスターにな

ってさ……それではやては幸せになれるんだよね？」

ふとヴィータが口を開く。その顔は不安で染まっていた。

「何だいきなり？」

「闇の書の主は大いなる力を得る。守護者である私達はそれを誰より知ってるはずでしょ？」

シグナムとシャマルはそう言うが、ヴィータは納得がいかない様子。

「そうなんだよ……そうなんだけどさ、あたしは何か大事な事を忘れてる気がするんだ」

ヴィータの言葉に皆が思案する。

「…まあ、誰よりも知ってるはずのヴィータがそう言うんだ。皆も心に留めておいてくれ。後、今後も仮面には注意するように」

俺はそう締めくくった……その時、何か金属の物が倒れる音がリビングに届いた。

「……っ!!?」

全員がその音を聞き、慌ててはやての部屋に向かった。

Episode はやて

朝、目を開くと、わたしは隣にヴィータが居ない事に気付く。

体を起こし、目を擦ると、リモコンを操作してカーテンを開いた。

ベッドのすぐ横にある車椅子に乗り移ろうと体をスライドさせ、足をベッドから下ろしたその瞬間だった。

「……あっ」

胸を締め付けられる様に苦しい。

「…はう……ぐっ……」

遂に、わたしはベッドの下に倒れてしまった。

32話 多分ほど当てにならない言葉はありません

Another View

「はあ、大丈夫みたいね。良かったわ」

石田先生がはやての状態を確認し、そう口にした。

「はい、ありがとうございます」

はやては先程まで苦しんでいたのがまるで嘘の様に笑顔でお礼を言う。

「はあ：ほっとしました：」

シャルは緊張の糸が解れたかのように、やんわりと声を漏らした。

「せやから、ちょい目眩がして、胸と手が攣っただけやって言うたやん。もう、皆して大事にするんやから」

はやては呆れたように言う。

「でも、頭打ってましたし……」

「何かあつては大変ですから」

そんなはやてにシャルとシグナムが反論する。

「はやて、良かった：」

身を乗り出して話しかけてきたヴィータの頭をはやてが撫でた。

「まあ、来て貰ったついでにちょっと検査とかしたいから、もう少しゆっくりしてってね」

そう石田先生に言われたはやては顔を引き攣らせ、返事をする。

その後、シグナムとシャルが石田先生に呼ばれ、病室から出て行った。

Episode ケイン

「入院!？」

「ええ…そうなんです…」

驚きの声を上げるはやてにシャルが答える。

やはり、さっきの石田先生の話ははやての容体の事だろう。麻痺が進行しているのか…。

入院の知らせを聞いたはやてとヴィータは表情を曇らせる。そんなはやてにシャルが心配を煽らないように、検査の入院で念の為に話したが、その後、はやての口から出た言葉はその場に居た全員が予想だになかった物だった。

「わたしが入院しとったら誰がみんなのごはんを作るんや？」

…膝の力が抜けるかと思った。

「そ、それはまあ、何とかしますから」

その事は考えていなかったのだろう。シグナムは言葉を濁す。

「そうですよ、大丈夫です。多分」

続いて、シャルは自信が無いのか、最後の方は苦笑しながら答えた。

「毎日会いにくるよ!だから、大丈夫…」

そう言うヴィータは自分に言ってる様に感じる。語尾が小さくなってる事からも、不安が伺える。

「ありがとう。ヴィータはええ子やな。せやけど、毎日やのうてもええよ。やる事無いし、ヴィータ退屈や」

「…う、うん」

頭を撫でながらはやてが答えると、ヴィータは只そう返事をする事しか出来なかった。

「はやて、何か読みたい本があれば図書館で借りて来るよ」

入院中はすることが無いだろうから、俺はそう提案する。

「うーん、せやなあ…」

はやてが言った本を俺はメモした後、少し話して病室を出た。

32話 多分ほど当てにならない言葉はありません(後書き)

次回から夜の一族編です。

33話 疾しいことは何もあります(前書き)

(注) 碧河はとらハ3はプレイしてないので分かりません。
他の二次創作の情報を元に書きます。

もしかすると、碧河のオリジナル設定が出てくるかも。

なので、夜の一族編は極力、読まなくても問題無いように書きます。

33話 疾しいことは何もありません

Another view

はやてが入院した翌々日。青山ケインは青山氏の家に行った後、はやてに頼まれた本を借りに図書館を訪れていた。

彼が青山氏の家に行ったのは、暫く学校を休ませて欲しいとお願いする為だ。はやての病状が悪化したのに加え、もうすぐリンカーコアを蒐集された三人が回復する頃だろうと考えたからだ。

以前、はやてに叱られた時は、高町とフェイトに見つからないようにすれば大丈夫だと青山ケインは判断して、学校に行った。だが、一度も二人に発見されていなかったにも関わらず、結界が張られ、彼は管理局に戦闘を仕掛けられた。

後々、彼がシグナムに聞いたら、探知系の魔法、若しくはそういった技術を使われたのだろうとの事。

つい最近、魔法の存在を知った青山ケインは探知魔法の事を知らなかった。それどころか、魔法の知識自体少ないのだ。故に、最近では時間がある時に、彼はヴォルケンリッターから魔法について教わっている。技術に関しては、彼等もあまり詳しくなかった。閑話休題。

以上の理由から、学校へは行かない方が良いと判断したのだ。

前置きが長くなったが、結果、青山氏は彼の願いを聞き入れてくれた。学校で高町とテストロッサに遭遇した時と同様、事後報告は義務付けられたが、彼は元々話すつもりだったので、それは全く問題はない。

青山氏宅での用事を済ませた青山ケインは、現在、図書館ではやてに頼まれた本を探している。

彼が目的の本がある童話のコーナーに足を踏み入れると、そこには先客がいた。腰まで伸ばしたウェーブ状の紫髪しはつをカチューシャで

止めた少女、月村すずかである。

Episode ケイン

「月村」

俺が声を掛けると、月村は視線をこちらに向けた。俺の姿を確認すると、彼女は目を細め、軽く会釈をする。

「青山さん。こんにちは」

「青山さんも本を借りに来たんですか？」

「ああ。はやてが退屈しないように、な」

月村の問いに答えると、彼女は少し表情を変えた。

「あの……はやてちゃん元気にしてますか？」

「ああ。入院って言っても検査の為のものだし、昨日、月村達が見舞いに来てくれたからな。はやて、凄く楽しそうに話してたぞ」

そう言うと、月村は安心した様に顔を綻ばせた。

「良かった。大勢で押し掛けてしまつて、迷惑だったんじゃないかと思つていたので…」

「また、会いに行つてやつてくれ」

「はい」

月村の言葉を否定する様に行つた俺の言葉に、彼女は嬉しそうに返事をした。

月村と一緒に図書館を出た所で、俺は彼女の方を向いた。

「ありがとう。お陰で思ったよりも早く済んだよ」

月村ははやてに頼まれた本を探すのを手伝ってくれたのだ。彼女はよく本を借りにここへ来る為、慣れた手付きで本を集めていた。

「いえ、これくらい大した事無いです。それよりも、はやてちゃんに宜しく伝えて下さい」

「ああ。それじゃあ、送ってくよ」

「いえ、そんな悪いですよ」

「気にするな。最近、日が沈むの早いし、さっきのお礼って事で」
そう言うのと、月村は申し訳なさそうに俺の申し出を受けた。

「済みません。それでは、お願いします」

俺は月村の家を知らないの、彼女が先導する。暫く他愛もない話をしながら歩いていると、俺は誰かに着けられている事に気付いた。

「：月村」

「はい、何でしょう？」

「悪い。この後、用事があったのを思い出したから、ここからは一人で帰ってくれないか？」

本当は別に用事なんて無い。

「そうですか。ここまでありがとうございます」

だけど、月村は特に疑いを持たず、俺にお礼を言った。

「ほんと、ごめんな」

「いえ、それでは失礼します」

月村と分かれると、俺は自身のスイッチを切り替える。恐らく、後を着けていたのは管理局の者だろう。俺は路地に入り、身を隠した。だが、俺を着けていた奴は表れない。もしかすると、俺を着けていた訳じゃないのだろうか…。

そうなる…：標的は月村！？

俺はすぐに路地から出て、月村を追いかけた。月村の姿は確認できなかったが、不審な動きをしている男を見つける事が出来た。だが、既に距離は開いていて、しかも、ちょうど小路に入っていく所だった。俺は急いで駆けだす。

不審者が入った小路に入るが、その姿を確認する事は叶わなかった。まだ、遠くへは行っていないはずなので、脇道を確認しながらそ

の小路を駆け抜ける。すると、さっきの不審者の男と気を失った月村を見つける事が出来た。

俺も脇道に入ると、不審者は俺に気付いた。舌打ちをして、上着の内ポケットに右手を入れた。俺は再び出て来た男の手と一緒に拳銃のグリップを視認した為、急いで近くの電柱の陰に隠れた。しかし、電柱の太さが足りず、右腕を銃弾が掠り、肉を少し抉った。

「悪いな。見られたからには、例えばガキでも死んでもらう」

男が撃った銃にはサイレンサーが装備されている。近くの住民が音を聞きつけて出て来る事は無いだろう。だが、それはこっちにとっても好都合。

「セブンスター、セットアップ！」

俺はデバイスを起動させ、バリアジャケットを纏う。

「な、何だ!!?」

男は拳銃を何発も撃つが、それは全てセブンスターの盾に弾かれた。やがて、弾切れになり、拳銃の空を打つ音が数回響いた。

「畜生っ!!」

男は銃をこちらに投げつけ、突っ込んで来る。俺は拳銃を盾で防ぐと、男をその盾で殴りつけた。男は壁にぶつかって倒れたが、まだ？^{もが}きながら唸っている。銃口を向け、引き金を引くと、ようやく大人しくなった。非殺傷設定なので男は死んではない。ただ気絶しているだけだ。

不審者の男はバインドで拘束した。

月村はどうやら気を失っているだけの様だ。

事が事なので、月村の携帯電話で彼女の家族に電話をしようと考えたが、女の子の荷物を漁ったりするのは気が引けた。ポケットを探すのなんて以ての外。着信したら音で場所を特定して取り出す事にした。

とりあえず、月村をアスファルトの上に寝かせておくのは気が引

けるので、横抱きにする。

気を失った人間は重いというが、今、俺の腕にいる月村はとても軽かった。他学年交流での大活躍がまるで嘘の様に思える程に。

辺りが完全に暗くなっている。今まで何人か通行人が現れたので、その度、塀の陰に隠れてやりすごした。不審者の男は物陰に隠している。

人が来ないか警戒していると、不意に月村の鞆から音楽が聞こえて来た。恐らく、携帯電話の着信音だろう。俺は片膝を付き、音を辿って携帯電話を取り出した。二つ折りのそれを開くと、ディスプレイには“お姉ちゃん”と表示されている。

「もしもし」

俺は電話に出た。

『：あなた誰？』

相手、恐らく月村の姉の声からは警戒の色が聞き取れた。それはそうだろう。妹に掛けたら男の声が聞こえて来たのだから。

「僕はすずかさんと同じ学校の青山ケインといいます」

とりあえず、先程起こった事と現在地を教えた。

『：分かったわ。これから迎えに行くから、そこでじっとしてて』
とりあえずは納得して貰えたようだ。

「はい。宜しくお願いします」

向こうが通話を切ったのを確認して、俺も携帯を閉じた。

「：んっ」

今まで静かに寝ていた月村は声を出し、目を開いた。

「起きたか？」

「：っ！！？」

今の状態に気が付いたのだろう。月村は体を強張らせた。

「落ち着いて。立てる？」

月村は頷いたので、俺はそっと立たせてあげた。彼女は暫く混乱

していたが、バインドで縛られた男を見ると、顔色は恐怖に染まり、震えだした。その場で両膝を付き、自身の体を抱く。気を失う前の事を思い出したのだろう。

「大丈夫…。もう大丈夫だ」

俺は月村の視界に不審者の男が入らないように体で遮り、彼女の背中を優しく摩さすった。位置的に月村を前から抱える様な形になったが、まあ、仕方ないとしておこう。ちゃんと安全ゾーン（お互いの体間の隙間）は空けてるし。

背中を摩さっていると、月村が俺の胸に額を預けて来た。

「…すみません…しばらくこのままでもいいさして下さい…」

「ああ」

俺達は月村の姉が迎えに来るまで、この状態でいた。

33話 疾しいことは何もあります（後書き）

何か後書きを書こうかと思ったのですが、忘れました（笑）

34話 誰だっ!?!今、コーディネートって言った奴!!怒らないから前に出

Episode ケイン

この脇道の前に一台の車が止まり、運転席から女性が一人、後部座席から男性と女性が一人ずつ降りた。三人はこちらをの姿を確認すると、こちらへ歩み寄る。

「すずかの姉の月村つきむら 忍しのぶよ」

後部座席から降りた、月村と同じく紫髪を腰まで伸ばした蒼眼の女性が名乗る。月村と同じと言っても、髪はストレートだし、目尻は低くない。

「先程、電話に出た青山 ケインです」

お互いに自己紹介を済ませると、未だ怯える月村を月村姉に差し出す。彼女は運転席から出て来たメイド服の女性に月村を任せると、再びこちらに向き直った。

「すずかを助けてくれて、本当にありがとう」

月村姉は中腰になり、視線を合わせ、軽く頭を下げる。そこで、彼女は血で真っ赤になった俺の右腕に視線を止めた。

「怪我の手当てをするから、あなたも車に乗って」

「すみません。お願いします」

応急手当は済んでいるが、このまま帰るとみんなに心配を掛けるかもしれないので、俺は月村姉の好意に甘える事にした。

月村の家に着くと、俺は応接間と思われる部屋に通された。俺はソファーに座り、先程運転席にいたメイドさん包帯を巻かれている。今、この部屋に居るのは、俺、メイドさんと、正面にテーブルを挟んでソファーに座る月村姉の三人だ。

「一応、処置はしましたが、ちゃんと医者に見せた方がよろしいで

しょう」

「ありがとうございます」

「いえ。では、私はこれで…」

メイドさんは立ち上がって一礼し、退室した。

「改めてお礼を言わせて貰うわ」

扉が閉まると、月村姉は口を開いた。

「いえ、あそこで月村を見捨てたら、送る意味が無くなっちゃいますよ」

「それでもよ。本当にありがとうございます。そして、怪我させちゃってごめんね」

月村姉は目を閉じ、再び頭を下げた。

「…それでね、青山君…少し、お話を聞かせて欲しいの」
頭を上げ、開かれた彼女の目は、蒼^{あお}から真紅に変わっていた。その目を視認すると、俺の意識は遠のいた。

Episode 忍

青山 ケイン、すずかを助けてくれたという男の子。

すずかを襲った男を調べると、彼は夜の一族の者だった。夜の一族は普通の人よりも身体能力が高いのだが、それを子供の彼が返り討ちにしてしまったのだ。

彼が何者なのか。彼は本当に敵でないのか。今日、起きた事は向こうの自作自演でないのか。

「…それでね、青山君…少し、お話を聞かせて欲しいの」

私は魔眼を使い、青山君に催眠を掛けた。これで彼は私の質問に嘘偽りなく答えるはずだ。

「……分かりました……」

感情の無い言葉を聞いて、催眠が効いた事を確認する。

「あなたはすずかを襲った男の関係者？」

「……いいえ。彼と会ったのは初めてで、こういった人なのかも知りません……」

「……どうやら、敵ではない様だ。そうすると、この子は一体……」

「……あなたは一体、何者なの？」

「……私はクラント公国陸軍第三特殊機動部隊所属、青山 ケイン……」

“くらんとかうこく”という聞いた事の無い単語が出て来た。後に続く言葉から推測するに、“こウこく”は公国だろう。つまり、国。

「くらんと公国なんて聞いた事無いわ。それはどこにあるの？」

「……こことは違う世界……」

こことは違う国、つまりは異世界。本来であれば、一笑する様な内容だけど、今は催眠が効いているので、少なくとも、嘘を吐いている訳では無いだろう。

「その異世界からどうやってこの世界に来たの？」

「……正確な事は分からないが、恐らく魔法が関係していると予想している……」

「魔法とはまたファンタジーな。いや、私も人の事は言えないか。」

「その魔法はあなたも使えるの？」

「……はい……」

「見せて貰っても良い？」

「……はい……」

青山君は答えると、青く光る球体が彼の周りを踊るように舞う。

私はそれを見て綺麗だと思った。これが魔法……

「あなたがあの男を倒せたのは魔法のおかげなの？」

「……それもありますが、それだけでは初撃を回避する事は出来ませんでした……」

……他にもまだ有るといえるのかしら。私は異世界や魔法でもうお腹

がいっぱいなんだけど…。

「それなら、他の要因は？」

「……私が人間兵器だからです……」

「…人間兵器、とは？」

「……軍の中でもエース級の人間から精子と卵子を取り出し、人工授精。その後、遺伝子を弄り、普通の人間よりも高性能の人間へいきを生み出して軍事利用する計画、人間兵器計画。その最終完成体が私……」

…戦う為に生み出された人間。彼の正体は予想の斜め上を行くものだった。

「…分かったわ。暫く寝ていなさい」

私は青山君を眠らせ、魔眼を解く。このまま意識を浮上させると彼の中で空白の時間が生まれてしまうので、眠ってもらって誤魔化す事にした。

34話 誰だっ!?!今、コーデイナーって言った奴!!怒らないから前に出

ケイン君はチート主人公では無い為、簡単に魔眼の餌食になって
しまいます（笑）

にしても、コーデイナー……ゲフンゲフン、人間兵器のケイン君
と渡り合える小板橋くんって一体……。

35話 まだフラグは立ってませんよ

Episode 忍

魔眼を解き、眠っている青山君をソファーに横にしてあげる。彼の寝顔は普通の男の子そのもの。人間兵器計画の完成体、とてもそんな風には見えない。

「忍、入るぞ」

「ええ」

外から男の声が私に届いた。返事をする、部屋の扉が開く。姿を見せたのは眉に被る黒髪に濁りの無い真っ直ぐな切れ長の黒眼の男性。私とは恋仲の関係にある高町^{たかまち}恭也^{きょうや}である。

「敵じゃないみたいね」

「ああ。だが、異世界に魔法か。にわかには信じがたいが…魔眼は効いていたんだろ？」

「ええ。魔法というのもこの目で見たし…」

魔法が使えなかったら、ただの妄想と考える事も出来たが、彼は実際に魔法を使って見せた。

「ひとまず、彼を客室に運びましょう。お願いして良い？」

私の提案に恭也は同意、了承し、青山君を背負い上げる。私は前を歩き、部屋の扉を開けて廊下に出た。

「ノエル、すずかは部屋かしら？」

廊下に待機していたメイドのノエルに妹の場所を尋ねる。

「…はい。自室で休んでおられます」

「そう。ありがとう」

ノエルにお礼を言い、青山君を恭也に任せ、私はすずかの部屋に向かった。

歩きながら、敵の事を考える。以前にも私が襲撃された事があった。その時の犯人、月村^{つきむら}安次郎^{やすじろう}は逮捕、投獄されたが、私達の所

有する技術を狙っているのは彼だけでは無い。むしろ、月村の人間のほとんどが安次郎側なのだ。すずかの誘拐に失敗した今、再び、ここが襲撃されるのも時間の問題だろう。

そんな事を考えていると、すずかの部屋の前にやって来た。私は三回ノックする。

「すずか、入るわよ」

「あ、はい」

中から声が返って来たので、中に入る。すずかはベットに座ってお茶を飲んでいた。すずかの傍らに彼女の専属メイド、ファリンが立っている。

「少しは落ち着いたかしら？」

扉を閉め、私は尋ねた。

「うん、もう大丈夫」

一つ安心した。まだ、襲われたショック立ち直っていないと思っただが、顔色も良いようだ。青山君のお陰かしら？よっぽど彼の事を信用しているのね。それとも、もしかすると、もしかするのだろうか。

「そう。でも、しばらくは外出を控えなさい」

「うん」

返事を聞いて、私は部屋を出ようとする、すずか私を呼び止めた。

「ねえ、お姉ちゃん。青山さんはもう帰った？」

早速、彼の事を聞いてきた。

「ふふっ…」

私が笑みをこぼした事にすずかは疑問符を浮かべる。

「そうよね。すずかのピンチに颯爽と表れたナイトだもの。そりゃ、気になるわよね」

そう言うと、すずかは顔を赤くなった。

「え？すずかちゃん、そうなんですか？」

ファリンがすずかに問うと、彼女は慌てて否定する。

「そ、そんなんじゃないよ。ただ、まだお礼言っていないし…その…」

そんな微笑ましい光景を見ると、庭から銃声が聞こえて来た。庭には、侵入者を撃退するために、ゴム弾のトラップがある。

「っ!? 早速過ぎないかしら? 今日、すずかを襲ったばかりだっていうのに…」

私が悪態をついてると、すずかが私のセーターを掴んできた。

「…お姉ちゃん」

襲われた時の事を思い出したのだろうか。怯えているのが見てとれる。

「青山君の所に行くわよ!」

すずかの手を引き、走り出す。途中、私の部屋に寄って、客室を指す。

「忍っ!!」

途中、恭也、ノエルと合流した。

「私達はケイン君の所に行く。二人は庭の方をお願い」

「分かった」

「はい」

二人の返事と同時に、五人は再び走り出す。

途中、ファリンが転んだりなんかしたが、皆無事に客間の前に辿り着いた。

青山君はまだ、寝ているだろうが、一応、ノックして部屋に入る。

「…あれ?」

ベットで寝ているはずの人が、どこにも見当たらない。

「…月村に忍さんでしたか」

上から声が降ってきたので、私は振り向いて見上げると、扉の棧に足を掛け、手を天井に付いて体を支えている青山君が目についた。彼は飛び降り、扉を閉めると、こちらに向き直った。

「…どうしてあんな所にいたんですか?」

すずかが私も、恐らくファリンも思っているであろう疑問を問う。

「銃声で目が覚めたんだけど、暫くして足音が近づいてきたから隠れたんだよ」

返答を聞いたすずかと、彼女の専属メイドはポカンとしている。だが、今は一秒も惜しいので、二人の事は置いといて、今の状況を説明した。現在、この家は襲撃されている事。さっきの銃声は庭に設置した防犯装置である事。今、こちらも庭で応戦している事。

「…何でここが襲撃されているんですか？今日、月村が襲われた事と関係あるんですか？」

「…詳しくは落ち着いたら話してあげる」

「お姉ちゃんっ！！」

すずかが批難の声をあげるが、それを無視する。

「その代わり、もしもの時はこれですずかを守って。私には戦う力が無いから」

私はそう言って、先程、部屋から取って来た拳銃を彼に渡す。

「お姉ちゃんっ、何を…！？」

「この世界の武器の使い方は分かるかしら？」

私がそう問うと、青山君の目つきが変わった。

35話 まだフラグは立ってませんよ（後書き）

この話を書き出したのは、一週間ほど前なのですが、二百字程度書いて一時保存。動画を見ている間に、ここが混雑状態となり、続きを書く事が出来なくなりました。

やる気が失せ、昨日まで放置してました（苦笑）

一話の文字数が少ないので、いつもなら一話書くのに日を跨ぎません。

更新間隔が長いのは、書かない日が多いってだけなんですよね。

碧河が遅筆というのがありますが（汗）

36話 ふと、キーワードに“残酷な描写あり”があるけど、そんなの無いじゃ

気が付いたら、書き始めてから一年以上経過していました。

ノリで始めた小説に何時まで時間を掛けているんだか（汗）

36話 ふと、キーワードに“残酷な描写あり”があるけど、そんなの無いじゃ

Episode ケイン

「この世界の武器の使い方は分かるかしら？」

忍さんはこの世界と言った。その言葉から察するに、彼女は俺がこの世界の人間じゃない事を知っている。

「…あなたは何者ですか？」

俺は忍さんに警戒の色を向けて問う。しかし、彼女はその問いに答えなかった。

「詳しくは落ち着いたら話すと言ったはずよ？今はこの状況をどうにかしないと…」

そう言い、忍さんは踵を返して歩き出す。だが、俺はそれを許すつもりはない。殺気を忍さんの背中に向けた。

「…質問に答えろ。あなたは何を知ってる？」

銃口をこちらに背を向ける彼女に合わせ、言い放つ。

「……私が知っているのは、あなたが異世界の魔法使いで、普通の人よりも優れた体を持つって事。それだけよ」

「どうして、それを知ってる？」

「……その問いには答えられないわ」

少し間を置いて、忍さんがそう答えた瞬間、俺は引き金を引いた。ギリギリ外したその弾は、彼女の紫髪を弾く。横から月村の声にならない悲鳴が聞こえた。

「…もう一度聞く。あなた達は何者で、どうして俺の事を知っている？」

それでも、忍さんは口を開かない。暫しの沈黙の後、言葉を発したのは忍さんではなく月村だった。

「……私達は夜の一族。生きる為に人の血を飲む化け物なんだよ」
そう答える月村の声は震えていた。そちらに視線を向けると、彼

女は俯いていて、表情を読む事が出来ない。

声を掛けようと月村の方を向くと、視界の端に光を捉えた。

「っ！？忍さんっ、隠れてっ」

俺は月村を忍さんに向けて突き飛ばす。瞬間、部屋の窓ガラスが割れ、中に三人ほど飛び込んできた。

侵入者の一人が部屋に着地した所へ、弾丸を放つ。それは侵入者の心臓に吸い込まれていった。弾が当たった事を確認せず、俺はテーブルの陰に飛びこむ。さっきまで俺が居た場所に弾丸の嵐が通過するが、それを気に留めず、テーブルの陰から腹這いの体制で残り二人の脛を打ち抜いた。断末魔を上げて倒れた侵入者の頭に銃口を向け、一回ずつ引き金を引くと、この部屋は静けさを取り戻した。

「忍さん、月村。無事ですか？」

部屋の外に居るであろう二人に声を掛ける。

「ええ、すずかも私も無事よ」

「そうですか」

二人の無事を確認して一息吐くが、俺は最初に心臓を撃った侵入者が、右手に持った手榴弾のピンを外そうと左手を伸ばしているのに気付いた。そいつに銃口を向けて引き金を引くと、再びこの部屋に銃声が響く。

「青山さんっ！？」

廊下から月村の焦るような声が発せられた。

「大丈夫だ。少しそこで待っていてくれ」

この部屋の惨状は月村に見せない方が良いだろう。

俺は侵入者の骸から装備を奪い取る。マシンガンと替えのマガジン、防弾チョッキ二着に手榴弾を手に入れ、二人の元へ向かった。

「お待たせしました。二人ともこれを来て下さい」

そう言い、先程奪った防弾チョッキを二人に渡す。

「月村はサイズが合わないだろうけど、何も無いよりは良いだろう？」

防弾チョッキは大人用なので、月村には大きすぎた。だが、彼女は非戦闘員なので問題無い。

「忍さん。この銃はあなたが持っていて下さい。さっき六発撃ちました。残りの弾数を把握しておいて下さい。」

拳銃を忍さんに渡すと、月村が口を開いた。

「…青山さん、あなたは何者なんですか？」

彼女は忍さんの服の裾を握り、恐る恐る問う。そんな月村を見ると、何だか申し訳ない気分になった。

「そうだな…：セブンスター、セットアップ」

少し考え、俺はデバイスを起動させる。バリアジャケットを纏う為、体が光に包まれた。

光が晴れると、服装が変わり、銃と盾を握っていた俺を見た月村の表情は驚愕と恐怖が入り混じっている。

「実は俺、魔法使いなんだ」

俺は笑みを浮かべ、月村の問いにそう答えた。

37話 短いですが、夜にも更新するので許して下さい

Episode すずか

「そこを曲がって」

お姉ちゃんが青山さんに指示を出す。私とお姉ちゃん、ファリンは今、飛行する青山さんに抱えられ、隠し部屋に向かって移動している。

ふと、私は私達を抱えて飛んでいる魔法使いの顔を見上げる。今、私が考えているのは彼の事。

青山さんは躊躇^{ためら}い無く人を撃った。だけど、私達の前に戻って来た彼はいつもの優しい青山さんだった。

青山さんは私達の秘密を知った。だけど、今、私を抱き抱える彼はいつもの優しい青山さんだ。

魔法使いって何なんだろう。……私達の事を知って、どう思ったのかな？

私がそうこう思案していると、前方に人影が表れた。それはノエルでも恭也さんでもない。敵である。その付近には、キャタピラ走行で、上に銃が付いてる円柱の機械があった。

相手は人間が二人、機械が六機。それら全てが私達に発砲を開始した。

「いやっ…!」

私は悲鳴を漏らす。銃弾は私達の元に飛んでこない。目を開くと、青山さんは滞空しているだけ。銃弾は私達の前に存在している見えない壁によって阻まれ、次々に床へ落ちて行く。

青山さんが私達を降ろすと、銃口を上に向け、敵の数だけ発砲した。すると、出て来た青色の弾が見えない壁を避けるような軌道を描き、相手へと吸い込まれて行った。

「もう一度飛びます。しっかり捕まって下さい」

「その必要はないわ」

お姉ちゃんが移動を再開しようとする青山さんを制し、敵が倒れている方に歩き出す。私達もその後を追った。

この先にあるのは倉庫の扉。それを開けて中へ入ると、お姉ちゃんは左側の壁を弄りだす。そして、壁の一部を押し込むと、床に半円の取っ手が出て来た。それを持って床をスライドさせると、中には梯子が下に向かって伸びていた。

「この中が目的地よ」

37話 短いですが、夜にも更新するので許して下さい（後書き）

タイトル通り、日付けが変わる前に投稿します。

38話 データの無い相手と戦うのはキツイものです（前書き）

予告通り更新。いやゝ、久し振りの連投です（汗）

書こうと思えば、一日で一話を書きあげられるんですb。ただ、書きたくなる頻度が高く無かったり、書きたいと思った時に書ける環境じゃ無かったりとするんです。

良い訳タイム終了（笑）それではどうぞ。

38話 データの無い相手と戦うのはキツイものです

Episode ケイン

忍さんを先頭に梯子を降りる。三人がスカートなので、俺が最後尾だ。

「敵に入口が見つからないでしょうか？」

俺が尋ねると、下から声が返って来た。

「ここはオートロックになってるの。だから、外は元通りになるはずよ」

なるほど。確かに、入口が丸分かりでは隠し部屋の意味が無い。そこら辺は問題無い様だ。

大体、二階分降りた頃だろうか。ようやく、下に着いた。

「今、明りを付けるから」

忍さんがそう言うと、部屋に明かりが灯る。部屋を見渡せる様になって俺達の目に写ったのは思いもしない光景だった。

「ようやくか。待ちくたびれたよ」

「…っ!!?」

目の前には五人の男が立っていた。俺が慌てて銃を構えようとするが、その瞬間、体中に激痛が走った。立つ事すら出来ない。俺は堪らず床に転がった。

Another View

床に体を預けた青山 ケインの正面に立つ若い男は真紅の瞳を黒に変える。彼の表情は、冷笑だった。

「っ！！ケイン君っ！？」

「おっと、動くんじゃないえ」

部屋に乾いた破裂音が響く。月村　すずかが床に伏すケインの元に駆け寄ろうとした所、別の若い男が彼女の進路を阻むように弾丸を放ったのだ。堪らず、すずかは動きを止めた。

「……彼をどうしたの？」

そう言うのはすずかの姉、月村　忍だ。その蒼眼そうがんで相手を睨む。その問いに答えたのは先程、瞳の色を変えた男だった。

「暗示をかけたんだよ。全身に有りもしない痛みを感じるように。成人でもショック死するレベルの激痛をなあ！」

何が可笑しいのか、男は楽しそうに笑っている。

「そんな……」

すずかは膝を着く。いつも優しげな笑みが浮かぶ顔が、今は絶望に染まっている。

「さて……それじゃあ、本題に入ろうか」

今度、口を開いたのは最初に声を発した男だ。歳は五十程だろうか。鋭い目に白髪が多少混ざった眉辺りに揃えられた髪。深くはな
いが、皺も出て来ていた。

「ノエルをそれに関わる技術を渡してもらう。この際、月村家の財産は良いでしょう」

「やっぱり、それが目的なのね。彼女の技術があれば、月村家の財産なんて目じゃ無い程の財が手に入る……」

「その通りだ。その技術はここで腐らせるようなものじゃない」

良く出来ましたと言わんばかりの冷たい笑みを彼は浮かべ言う。

「…断るわ。ノエルは大切な家族よ」

そう忍が答えると、男から笑みが消えた。

「……どうやら、その大切な家族を失わないと分からないようだね。あの子を撃つ準備を」

先程、発砲した若い男に指示を出す。

「何をっ……！！」

「賢い選択をして欲しいものだね」

忍は言葉を遮られ、最終通告をされる。彼女は悔しさで歯を噛みしめ、手を強く握りしめた。

「ノエルを……」

忍がそこまで良い、言葉に詰まったその時、若い男の持つ拳銃が何かによって弾き飛ばされる。銃を持ってた若い男は手を抑え、蹲うずくまった。

「何事だ!？」

齢五十程の男が少し慌てて、銃が飛んだ方の反対を見ると、ケインが腹這いで銃を構えていた。しかし、彼の手は震えていて、やつとの思いで一発放ったという感じだ。

「まだ動けるか……。おい、まずはこいつから始末しろっ」

別の男が手に持っていた拳銃をケインに向ける。

「青山さんっ!!」

「青山君っ!!」

すずかと忍が叫ぶ。だが、男の指は止まらない。ケインに向けられた銃の引き金が引かれようとした、その時だった。突然、天井が崩れた。

「ぐっ……」

「クソッ、何なんだ!？」

男達が悪態を吐いてる事から想像するに、彼等の仕業では無い様だ。かといって、月村サイドが起こした事でもない。

「ケインっ、無事か!？」

砂埃の中から聞こえて来たのは女の子の声。煙が晴れると、そこから出て来たのは赤い帽子に赤い服の女の子。服は黒のフリフリがついたゴシッククロリータ。青く鋭い目に二つに編まれたオレンジの髪。手には柄の長いハンマー、グラーファイゼンを持った、そう……ヴォルケンリッター 鉄槌の騎士、ヴィータだった。

38話 データの無い相手と戦うのはキツイものです（後書き）

人間兵器は精神力も普通の人間より高いのです。

39話 どうしよう……ああ、どうしよう…… **b y作者(前書き)**

最初の恭也視点の文はいきなり過ぎに感じるかもしれませんが、前話からの流れで読めば違和感は少ないと思います。

まあ、こんな更新間隔が開いたのに、前話からの流れと言われても無理ですよえ…… (汗)

39話 どうしよう……ああ、どうしよう…… by 作者

Episode 恭也

俺とノエルが侵入者といくつも湧いて出るロボットをあしらっている、桃色の光を纏った鞭の様な物が上から伸びて来て、ロボットを蹂躪した。視線で鞭の元を視線で辿る。すると、空に軽装な西洋風鎧を付けた桃色の長髪をポニーテールに纏めた女性が浮いていた。彼女はこちらに背を向け、敵と向かい合う様にゆっくり降りてくる。彼女も彼と同じ……魔導士なのだろうか？

「貴殿等が恭也殿にノエル殿で相違ないな」

地に降り、対峙する敵に剣の切っ先を向け、半身でこちらを向くと、魔導士であろう女性は俺達に確信めいて尋ねた。

「……何者ですか？」

ノエルが女性の問いに答えず、油断無く聞き返す。すると、彼女は敵に向き直り、答えた。

「私はヴォルケンリッター烈火の将、シグナム。ケイン殿の家族です」

Episode ヴィータ

鳴りやまない発砲音。五人いる男の内、連射式の両手銃を持っている二人があたしに向け引き金を引き続けていた。だが、放たれた弾はあたしのパンツァーシルト、ベルカ式魔法特有の三角形をした魔法陣を展開した盾に全て阻まれている。その間にあたしはシグナムにケインから聞いた情報を思念通話で伝えていた。

『あと、敵と目を合わせるなってさ。ほんじゃ、あたしもそろそろこっちを片付ける』

こちらからの思念通話を切り、弾丸サイズの鉄球を五つ取り出し、それを宙に浮かせて待機させる。

暫くする防御していると、途切れることなく続いていた銃声が止んだ。その隙を見て、パンツァーシルトを解き、鉄球をグラーフアイゼンで打ち出す。打ち出された鉄球はそれぞれ五人の胴に命中し、その体を打つ飛^{ぶつ}ばした。

五人全員が倒れているのを確認し、あたしはケインの元に歩み寄って問う。

「ケイン、立てそうか？」

「いや……暫くは無理そうだ」

荒い息を無理矢理落ち着かせ、彼は答えた。

ケインの奴、思ったよりもやられてるな。くそっ、あいつらもつと殴ってやろうか……。

「なら、少しそのまま休んでろ。あたしも暫くここに居る」

「ああ、済まない……」

ケインはそう言うのと体の力を抜いた。場が一瞬、静かになる。

「あの……ちよつと良いかしら」

「…何だ？」

ケインの近くに居た女二人の内、でかい方があたしに声を掛けた。

「ケイン君の仲間が良いのよね。さっきは助けてくれてありがとう」

「……別にお前等を助けた訳じゃねえ」

「それでもよ」

彼女は微笑みを浮かべ、そう言った。あたしはそんな彼女を見てられなくて顔を逸らす。と、そんな時。

「おのれ……」

「っ!？」

男達の方から声が呻き交じりの声が聞こえた。視線を向け、戦闘態勢をとると、一人のおっさんが仰向けになり、懷から鏡を取り出

40話 集結（前書き）

かなり短いけど、キリが良いので更新します。

40話 集結

Another View

「君はなのはの……」

一触即発。そんな空気の中、二本の小太刀を手にした剣士、高町恭也が彼の見知った制服姿と異なり、黒を基調としたバリアジャケットに黒い斧型デバイスを構えた金髪少女、フェイト・テストアッサを視認すると、驚きを隠しきれずに言った。

「なのはの……お兄さん？」

フェイトも魔法の事を知るはずもないなのはの家族を見て動揺する。

「そうか……君も魔導士だったのか……」

魔導士。その言葉が彼から出た事に、フェイトは更に驚いた。

「……恭也殿は彼女の事を御存じで？」

そう恭也に問うシグナムは警戒態勢をフェイト達からこの場に居る全員へと変えた。ここにきて、恭也の立場が分からなくなったのである。

「妹の友達です。ただ、彼女が魔導士だったっていうのは知りませんでした。だから、そう警戒しないで下さい」

彼のこの言葉を鵜呑みにした訳ではないが、シグナムは恭也への警戒を少し緩めた。

これまでのやり取りの最中、^{さなか}管理局側の少年、クロノ・ハラオウンはこの場をどうするか決め兼ねていた。このままシグナムを確保したいのだが、ここには魔法と無関係と思われる管理外世界の住人がいる。もう魔法の事は知っているようだが、管理局自らが必要以上に接触するのは好ましくない。

クロノが思考を巡らせていると、凜とした目に薄紫の髪を^{びん}髻以外ショートに揃えたメイド、ノエルが口を開いた。

「みなさん。ここの家主からです」

彼女はテレビ通話状態の携帯電話を皆に向ける。画面には真っ直ぐな紫髪を腰まで垂らした蒼眼の女性が写っていた。

『私は月村 忍、この家の者よ。そっちの状況はケイン君伝手に聞いたわ。今回、管理局の方々は退いてもらえるかしら?』

「しかしっ、こちらも……」

『……これはお願いではないの。もし、お帰り頂けない場合は、私達はケイン君達に着くわ』

クロノは反論するが、その声を遮って忍は警告する。クロノは苦虫を噛むような表情になった。

「……フェイト、アルフ、退こう」

「……うん」

フェイトも複雑な表情で返事をする。それを切っ掛けに、管理局側は撤退した。

「それじゃあ、ノエル。みんなをリビングに案内して」

「かしこまりました」

携帯電話は通話状態が終わり、画面から忍さんが消える。

「では、こちらにどうぞ」

ノエルを先頭に、この場に居る全員が歩き出した。

41話 夜の一族編終了。てか、半年もかかったのかよorz(前書き)

地の文の率が少ないね。地の文6割以上には程遠い……。

41話 夜の一族編終了。てか、半年もかかったのかよorz

Episode ケイン

俺は月村家の廊下をヴィータの肩を借り、忍さんの後を着いて歩いた。忍さんの斜め後ろにいる月村は時折、心配そうに振り返り、こちらの様子を伺っている。

気分は最悪だ。暗示は忍さんに解いてもらった為、痛みは消えたが、ズキズキとくる頭痛と倦怠感が酷い。

「着いたわよ」

忍さんはそう言い、角部屋の扉を開けた。

「ノエル、リクライニングチェアを用意して。ファリンは毛布を。すずかはケイン君が椅子に座るのをヴィータちゃんと手伝ってあげて」

中には既にノエルさん、恭也さん、シグナムが居た。忍さんは素早く指示を出すと、ノエルさんがリクライニングチェアを設置。ヴィータと月村はそのリクライニングチェアに俺を座らせ、皆の顔が見える程度に背もたれを下げた。

「わ、わわわっ……あうう」

声のした方に目を向けると、ファリンさんが何もない所で躓き、手に持っていた毛布を放り投げながら転ぶのを目にする。毛布が下に落ちる前にノエルさんがそれをキャッチし、俺にかけてくれた。

「……大丈夫ですか？」

ファリンさんに掛けた声は自分でも弱々しく感じる。それを感じ取ったのか、ノエルさんが口を開いた。

「ファリンはいつもああなので、気にしないで下さい。それよりも、今は自信のお体を」

「……済みません」

「いえ。こちらこそ、お嬢様達をお助け頂き、ありがとうございます」

す」

ノエルさんはペコリと頭を下げる。

「さて、みんな揃ったし、話を始めましょうか」

忍さんはそう切り出し、まずは今回の事件について話した。

曰く、ノエルさんは人間ではなく、高い戦闘力を有した機械人形であり、忍さんが親から相続した財産、ノエルさんの技術を他の月村家の人間が我が物にしようと狙っているとの事。今回の襲撃者も同様で、彼等はその技術を用いて莫大な富を築こうという魂胆だったらしい。ちなみに、フアリンさんも同じ機械人形らしい。

「今日の事はこんな所かしら。次に、何故、私がケイン君の正体を知っているかだけど……それにはまず、私がどういう存在かって所を話さなければならぬわね」

忍さんはそこで一呼吸置く。この時、正面に座っている月村が体を固くしたのを、俺は見逃さなかった。

「……私達も普通の人間じゃないの。夜の一族って言って、簡単に言えば吸血鬼よ。心理操作、切断されたパーツの再生などの能力があつて、常人よりも高い身体能力を有しているわ。始め、私はあなたの事を信用していなかったわ。だから、心理操作でああなたの素性を調べさせてもらったの。まさか、“こことは違う世界”やら“魔法”“人間兵器”なんて言葉が出るとは思わなかったわ。ごめんなさい……」

忍さんは話し終わると頭を下げた。

確かに気分の良い事ではないが、忍さんの心配も理解できる。

「忍さん、頭を上げてください。忍さんが僕を疑ったのは仕方ない事ですから」

「……そういつてくれると助かるわ」

忍さんとの会話に区切りが付き、俺は月村に目を向ける。すると、俺の目に映ったのは俯いて肩を震わせる月村の姿だった。

「……月村？」

俺が声を掛けると、彼女は震えた声を出した。

「……私、人の血を飲む吸血鬼なんです」

「……………」

「私のせいで青山さんにご迷惑をかけてしまって、その上、青山さんの秘密まで……」

「……………」

「私……」

「月村」

俺は月村の言葉を遮って月村の名前を呼び、体に鞭を打って立ち上がる。

「ケイン!!!」「ケイン殿!!!」「ケイン君!?!」

「大丈夫だ!!!!」

みんなが立ち上がり、俺の元に駆け寄ろうとするが、俺はそれを言葉で制した。テーブルの上に手を付きながら月村の元に行く。

「月村」

月村の側に着くと、俺は片膝を付いて、強く握りしめている彼女の左手の上に自身の右手を乗せた。月村はピクリと動き、こちらに涙を溜めた目を見せた。そして、儚く微笑み、俺に語りかける。

「やっぱり、青山さんは優しいですね」

「……別に取り立てて優しくは無いよ」

そう答えると、月村は首を横に振った。

「そんな事ないです。凄く優しいです。……青山さんは私の事、怖くないですか?」

「どうして俺が月村を怖がらないといけないんだ?」

「だって……私、化け物じゃないですか……」

今度は悲しそうな笑みを浮かべて語る。だが、俺がそれを認める訳にはいかない。

「俺は人間兵器だ」

月村は俺の意図が掴めていない様子。俺は言葉を続ける。

「戦う為に遺伝子を弄られ、戦う為に生れ、戦場で戦い、何人もの人を殺してきた。なあ月村、俺は化け物なのか?」

だとしたら悲しい。

「そんな事ないですっ！青山さんは化け物なんかじゃありません！」

月村はは全力で俺の言葉を否定する。良かった。なら、俺は化け物じゃない。

「なら月村、化け物って何だと思う？」

俺の質問に少し考えたが、はっきりとした答えが出てこないようだ。

「俺はな、人が化け物と認識した存在が化け物だと思うんだ。……ヴィータ、お前は月村が化け物だと思うか？」

俺に突然話を振られたにも関わらず、ヴィータは当たり前のように即答する。

「馬鹿言うな。こいつのどこが化け物なんだよ」

「シグナムは」

「私もヴィータと同じです」

シグナムも調子を崩さず答えた。

「ノエルさん、ファリンさんは？」

「すずかお嬢様は化け物なんかじゃありません」

「そうですっ。すずかちゃんわたし大切な主です！！」

ノエル、ファリンの順番で答える。視線を月村に戻すと、彼女の目は決壊寸前だった。

「だそうだ。月村？それでもお前は自分を化け物にするのか？」

俺が月村に尋ねると、ついにその目から涙が零れた。

「運動神経は抜群だけど、少し引っ込み思案でとても優しい。そして、俺の大切な友達。俺にとって月村はいつだって、そんな女の子だよ」

例え誰かが月村を化け物にしても、俺がそれを否定する。月村は化け物いなんかじゃない。

「……あっ……うう……ああ……」

耐えきれず、涙だけでなく月村の心も決壊した。これで彼女の心

の闇が少し晴れたのであれば嬉しい。俺は彼女が泣き止むまで頭や背中を撫でた。

Episode 忍

事件が終わった翌朝。ケイン君達が帰るので、みんなで玄関までお見送りしている。

「今回は迷惑かけちゃってごめんなさい。そして、本当にありがとう。また遊びにいらっしやい。歓迎するわ」

事件にしても、すずかにしても、感謝してもしたりない位。

「そうですね……平和に過ごせるのであれば、いずれまた」

「そうね」

ケイン君の意地悪な言葉に、私は苦笑するしかない。

「でも」

彼はそう言って、すずかに視線を向けた。

「何かあったら、すぐ俺を呼べよ」

「はい」

すずかは嬉しそうな声で返事をする。

「それでね。私達の事は秘密にして欲しいの」

「分かってます。それでは、これで失礼します」

そう告げると、ケイン君達三人は魔法で何処かに消えてしまった。

「……それにしても、良かったのか？」

そう言ったのは私の横に居る、恋人の恭也。彼が言いたい事は分かる。夜の一族の掟として、正体がばれたら、その者の記憶を消すか、夜の一族に関する事を公言しない事に加え、盟友若しくは恋人になる事を誓わせなければならない。にも関わらず、今回したのは口止めだけ。でも……。

「必要無いと思わない？だって……」

視線を落とすと、そこでは妹が綺麗な女の子の表情をして、彼の消えた空間を見つめていた。

41話 夜の一族編終了。てか、半年もかかったのかよorz（後書き）

フラグが立った……のか？

とまあ、こんな感じで夜の一族編が終了しました。

夜の一族編に入る前、ここは読まなくても良いように書くと言ったにも関わらず、ケイン君の正体という重要事項を書いてしまいました（汗）

ちと、活動報告で謝ってきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4326/>

魔法少女リリカルなのはA'S 次元を超えし願い

2011年12月19日09時48分発行